
white snow

皚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

white snow

【Nコード】

N9198V

【作者名】

畔

【あらすじ】

主人公の齊木は原因不明の病で医師に余命一年と宣告された。齊木が入院している病院にはテレビもラジオもなく、情報入手がとても困難だ。そんなある日、高校時代の友人が入院先にやってきて、衝撃的な事実を告げる。舞台は2XXX年。世界一平和だった日本は数百年の時が経ち、世界一治安の悪い国へと変貌してしまった。
。 “ 外の世界 ” の続きです。途中からファンタジー要素が入ります。

h o s p i t a l o n t h e m o u n t a i n (前書き)

『travelers』シリーズの一つです。舞台も主人公も前作と違います。駄作ですが、よろしくお願いします。

hospital on the mountain

瞼を開けてみれば、視界が白い。よく見れば、それは天井の色だった。

辺りはもう薄暗かった。僕は時計に目をやる。午後四時。通りで暗いはずだ。僕は変な時間に眠ってしまったらしい。

静かだった。物音一つしない。ベッドの傍にある、たった一つしかない窓に付けられてるカーテンが閉められていた。寝起きでだけるい身体を起こし、僕はカーテンを開ける。

雪が降っていた。彼らは留まることを知らない。何となく息苦しさを感じ、僕は思い切って窓を開けた。冷気が室内に滑り込んでくる。予想以上に外の空気は冷たかった。だが、再び窓を閉める気にはなれない。この何とも言えない息苦しさが無くなるまでは。

その時、音がない、神秘的でもあると言える時間が唐突に終わりを告げる。

それでも気を使ったのだろう、遠慮がちな音を立て大きく開かれた扉の奥から現れたのは背の高い男だった。

「気分はどうだ？ 斉木」

「最高だよ」

僕は窓の外を見たまま言った。「今まさに君が現れなければ」
彼は微かに笑う。

「具合はどうだ？」

「良いとは言いがたいね」

「悪くはないんだな？」

雪が降っている。彼らは留まることを知らない。

彼らはまるで旅人だ。世界中を巡ることができる。

「今は悪くない。けれど、きつといつか悪くなる」

僕にとって外とは、この正方形の窓の向こう側だけだ。

「そんなこと言うなよ」

彼はショックを受けたように表情を曇らせた。

わざわざ辺境の地に見舞いに来てくれた変わり者、陣内じんないともかず智利。高校時代の親友であり、悪友であるとも言える。彼がどう思っているのか知らないが、少なくとも僕はそう思っている。

「大学は楽しいかい？」

僕が尋ねると、陣内は苦笑した。「何だよ、嫌味か？」

「いや、そういうつもりではなくて。見ての通り、僕はどこにも出してもらえないからね」

僕は何本ものチューブが繋がれた腕を上げて言った。

あれは高二の時だった。吐き気と無気力感から始まった原因不明の病。今では激しい頭痛や、一時的ではあるが記憶喪失などもある。医師の話を聞くと、もって後一年だそうだった。

「楽しくないに決まっているだろ。俺は何もしないでのもんぶりしていたいんだ。お前が羨ましいよ」

「もうすぐ死ぬって言うのにな？」

もはや僕にとって『死』という単語でさえジョークになりつつある。それを分かっているからこそ、陣内も余計に気遣わない。

「ああ、それでもお前が羨ましい。戦争でのたれ死ぬよりはマシだ」

陣内は呟くように言った。

「ここは静かだな。あの喧しい砲弾の音が聞こえない」

すっかり暗くなってしまう。それでも陣内は、聞こえもしない

機関銃の音を聞き逃すまいと外を見ている。

「山の上にある病院だよ。静か過ぎて退屈だ」

僕は電気をつけた。眩しく感じるほど室内が明るくなり、窓から見える景色は黒一色になった。陣内は小さく溜息をついた。無理もない。

「大学では何を専攻しているんだ？」

「このご時世、選ぶもへつたくれもない。もうお前が高校にいた頃とは違うんだ」

土産だ、と言って陣内はサイドテーブルに紙袋を置く。

「日本は変わった。俺たち日本人の特徴である平和主義は一体どこにいつちまつたんだろうな。電車の中で単語帳を開いていた学生は、今や銃を持っている。居眠りをしていたサラリーマンは、眼をギラつかせて一人一人の行動を監視している。知ってるか？ 世界で一番治安が悪い国がどこか」

「ソマリアだろ？」

高校時代、社会の先生がそう言っていたのを僕は思い出した。

「それが違うんだ。世界で一番治安が悪い国は、なんと日本なんだぜ」

陣内はさも面白くなさそうに言った。

「県なんてあってないようなものだ。ほとんどの街が腐敗している。奴隷制度もできた。たった数年で、だ。信じられるか？」

にわかには信じられない話だ。僕がそう言くと、陣内は国会議事堂がある方角を睨み、吐き捨てた。

「そうして国は滅びていくんだぜ」

来た時には分からなかったが、彼は相当疲弊しているように見えた。

「見舞いに来たつてのに悪いな、愚痴っちまって。もっと気の効いたことが話せれば良かったんだが」

「そんなことないよ。僕は話相手がいてくれて嬉しい。誰かが来ない限り、一人だからね」

テレビもラジオもないこの部屋で、僕がリアルタイムの情報を得られる機会は少ない。

「……変わってしまったんだな、何もかも」

「またな」

そう言つて陣内は歸つて行つた。

『またな』。その言葉にどれだけの信憑性があるのだろうか。次に会うことは永久にないかもしれないのに。

再び静まり返つた部屋。僕は彼が残していった紙袋の中を覗いた。本が三冊入っている。その他に雑誌類が二冊ほど。僕はまず雑誌を手を取つた。見出しは『日本の表事情と裏事情』。外の事情を全く知らない僕のために買つてきてくれたようだ。陣内は戦争を嫌う。もちろん僕だつて嫌いだ。けれど、避けられないことは世の中に沢山ある。たとえば僕の病気のように。

動物には本能というものが存在する。自らの命に危害を加えようとするものを無意識に回避しようとする。それが本能であり、『嫌い』という言葉の真の意味だ。『怖い』も同じだろう。だが、それはあくまで一時的な危機に直面している場合である。彼のように

陣内のように 常に恐怖と対面している場合、感覚は麻痺するのだ。

感覚の麻痺。それは、死に近いところにいるということだ。

「斉木さん、お電話ですよ」

看護婦は病室にやって来るなりそう言い、役目を果たすとまるで

嵐のような速さで帰って行った。この病院の看護婦は愛想が悪い。

僕は立ち上がり、フロントにある公衆電話まで歩いて行った。僕の行動範囲は限られている。病室と　　今や自室と言っても過言ではない　　廊下とフロントだけだ。あとは診察室くらいか。

それにしても、と僕は思った。僕宛てに電話がくるなんて珍しい。「もしもし？」

すると電話口から陽気な声が聞こえる。

「おおっ、サイキヤな！　どや、元気しとるか？」

あまりにも場違い過ぎて、あまりにも終末の世界に似合わない男は電話口の向こうで快活に笑ったような気がした。

「病人相手に元気も何も……」

「何や、聞こえん。もーちよい大きな声で言えや」

「……元気だよ」

彼の名前はマイケル・スコット。僕が中学生の時に知り合ったアメリカ人である。イントネーションその他諸々を関西で学んだらしく、流暢な関西弁で話す。

「久しぶりやゆうのに、冷めたところは相変わらずやな。昔の日本人はもつと温かみのある人たちやったらしいで」

恐らく今、彼は米国人らしく肩を竦めていただろう。

「昔の人たちと僕に何の関係があるのか分からないね。そ　　つちは大丈夫かい？」

「アメリカは大丈夫や。こつちには最強の兵器があるさかいな。それにしても、日本も随分変わりよつたのう。国内での戦争やからどこの国も手出しできへんけど、こつちは戦々恐々しとるで。まさか『あの』日本がアメリカ並の戦力をつけるとは誰も思ったらへんかったし」

僕は思わず笑ってしまふ。

「陣内も似たようなことを言っていたよ」

すると、マイクは嬉しそうに声を弾ませた。

「ジンナイが来とるんか！　サイキ、電話変わってくれへんか？」

奴とも話したいんや」

「陣内はさつき帰ったよ。君の電話と入れ違いだ」
悪いね、と僕は言う。

「……そうかい。今度は電話やのーで、そっち行くわ」

「ああ。楽しみにしてるよ」

「ほな、さいなら」

「じゃあな」

僕は電話を切った。

電気が消えたフロント、灯りはほとんどついていない。そんなところを一人。そう思うと、先程までの明るい気分が一気に消え失せてしまった。僕は考えを振り払って病室に戻る。

消灯された部屋から外を覗き見る。相変わらずの雪だ。僕も外に出られたら いや、考えるのは止そう。どうしようもないことだと諦めてしまえばいい。僕はそう思った。今までの僕ならきっと
そう思うはずだった。

t h e m a n l e f t a s i c k r o o m i s h e .

「どこに行く気だ？ 斉木」

振り返ると、そこには帰ったはずの陣内がいた。彼は不機嫌そうにこちらを睨んでいる。

「どこつて……。ちよつと散歩に」

「真夜中に散歩する病人がどこにいる？ そいつは病人ではなくただの不審者だ。このことからするに、お前は不審者なんだろう？」

「病院内で点滴を腕につけて、迷いもせずに正しいルートを歩く不審者なんていない。もしいたとしたら、それはただの患者だ。つまり僕は患者だ」

僕が反論すると陣内は不服そうに顔を顰めた。「お前の言うことは間違っている」

「え？」

何か間違っていることなどあっただろうか。

「お前は患者じゃない。ただの患者だ」

陣内は『ただの』を強調して言った。屁理屈にも程がある。

「それで、どこに行こうとしていたんだ？」

どうやら嘘は通じないらしい。僕は観念して言った。「外に」

「外？」

陣内は意外そうに訊き返した。僕は頷いた。彼は暫く考え事をするように腕を組んだ後、真面目に言い放った。それは至極まともな意見だった。彼にしては珍しい。

「点滴をつけたまま、その見ているだけでも寒そうな格好で真冬の外にダイブするのかわ？」

そうするしかないだろうと僕が言うと、陣内は笑った。

「お前はチャレンジャーだ、斉木。よしっ、俺がお前の未来を予想してやるう。お前は明日、確実に死んでいる」

「死因は？」

「凍死だ」

僕は笑いが堪え切れなくなりそうだった。彼にコートを貸してもらい、僕は彼と一緒に外に出た。そして思い知る。ここで彼に出会わなかったら、僕は確実に凍死していただろう。

「どうしてここに？」

まだ残っているのだと尋ねる。

「何となくだ。今日お前を見舞った時、何となくだがお前が外の世界に憧れているように見えた。ただでさえ死にそうなお前が外になんか出てみる。一瞬であの世行きだ」

「けれど、僕はまだ生きています」

「それは俺のおかげだ。ありがたく思えよ？」

そして、僕たちは笑い転げた。心の底から笑ったのは久しぶりだった。友人とはいいいいものだなと老人のようなセリフが頭を掠める。けれどそれを口にするのは恥ずかしかったから、僕は何も言わなかった。彼に爆笑されるのがオチだ。

「陣内、頼みがあるんだけど」

「何だ？」

目に涙を浮かべて腹を抱える陣内。

「僕をここから出してくれ」

『諦めるのか？』

もう顔すら覚えていない。しかし、しわがれた声をしたその人は僕に向かって話しかけた。

『諦めるというのはな。死ぬということじゃ』

「出る？ お前が？」

冗談じゃない、と陣内の表情は物語っていた。

「だけど陣内。僕はもう嫌なんだ」

この閉鎖された空間で生きるのは。

「お前の気持ちは分かるが。俺は医者じゃない。医者じゃない俺にはゴーサインを出すことができない」

「分かっている。誰にでもいい、ただ言っておきたかったんだ」

僕は言葉を切った。深く息を吸った。雪は僕を嘲笑うかのようにひらひらと舞っていた。

「僕はここから出ていくよ」

遠くの方に照明弾の光が見えた。倒壊しかけた高層ビルが見えた。ヘリコプターは真つ暗なステージで喧しく踊る。

寿命が縮まってもいい。後一年だろうと、半年だろうと、明日死んだって構わない。僕はこの目で現実を見たかった。この終末的な世界を。

doctor said lie for him .

「……ガ戻ラナイ？」

「エエ、ソウナンデス。……ト言ウヨリモ、ドウヤラ捏造シテルヨウデ」

彼らは声を潜めて話していた。

「アア、彼二何テ言エバイイノデシヨウ」

三十代をとくに過ぎた女は頭を抱える。

「心配スルナ」

男は彼女を慰めるように言った。「対処法ハアル」

陣内は首を横に振った。

「駄目だ、斉木。お前があの中において平気でいられるはずがない」

「そんなこと、やってみなければ分からないじゃないか」

それでも僕は粘る。

「無理だ」

陣内は言い切った。彼がどうして頑ななのか分からなかった。そこで僕は、先程感じた違和感に気付く。

「陣内。どうしてさつき、『駄目だ』とは言わずに『無理だ』と言ったの？」

彼が断言したのは。そう、『駄目』という言葉ではない。『無理』という言葉だった。

点滴が無くても生きていける。僕は医療器具に囲まれていなければ生きていけないというわけではない。点滴を受けているのは、病院食を食べたくないがゆえ。あの味のない食事を取るくらいなら点滴をした方がましだ。

陣内は隙を突かれたような顔をした後、困ったように笑った。

「お前は病気なんだ、見るからに不健康そうだぜ。そんな身体で戦争の中に飛び込む気か？」

戦争に興味はない。だが、滅びゆく世界には興味があった。滅びが美学だと言った人は一体誰だったのか。もう覚えていない。

チューリップは死ぬ前に綺麗な花を咲かす。蝉は死ぬ前に透き通った羽を広げる。人間の死はあまりにも無様だ。老いだけがそこに残る。彼らのような『滅び』を感じさせるものは何もない。

働き蜂は使命を成し遂げて死ぬ。僕は何もしまま、ただ命を繋いでもらっている。まさに今、僕は人間らしい死に方をしようとしていた。生きる価値がないというのはこういうことなのかと痛感する。

「いつ死ぬかなんて問題じゃない。僕にとって問題なのは」
「どつという経路で死んだか、だ。」

滅びゆくものこそがこの世で最も美しい。僕はそう思っている。

「オイッ、大変ダ！ 患者ガ逃ゲタゾ！」

医師たちが騒ぎ始めたのが聞こえ、さすがにまずいなと思った。

「才前八向コウヲ探セ！ 私ハコツチヲ探ス！」

彼らはいつも無表情だ。もつと怒ったり笑ったりすればいいのにといつも思う。僕には、彼らの声がロボットの発するもののように聞こえた。彼らがたとえ死んでしまっただとしても、僕には悲しむことができないだろう。

諦めは死に繋がると語った老人はもういない。そうだ、思い出した。彼が滅びの美学を教えてくれたんだっけ。

掌で生死を左右させることができる医者よりも、戦場で生きる屈強の戦士の方が、この美学には相応しい。命がけで何かを成し遂げて死ぬことが、最も美しい『滅び』だ。牢獄に閉じ込められていては到底無理な話だ。だから僕は外に行く。ここでは見つけられない何かを見つけるために。

「大丈夫か、斉木？」

前を走る陣内が速度を落とし、心配そうに尋ねてきた。僕は頷いた。言葉を返す余裕などなかった。久しぶりに走ったから息が苦しい。

最終的に折れたのは陣内の方だった。

「昔から、何かを一度決めると俺がどれだけ反対しても聞く耳を持たないからな、お前は」と、彼は苦笑していた。

騒がしい廊下。普段はいつでも静まり返っているというのに。

ようやく時間が動き出したんだ、と僕は思った。

the girl they met was very hungry.

もう雪は降っていないかった。寒さだけが取り残される。

齊木と陣内は滑りそうになりながらも慎重に山を下った。医師たちが追いかけてくる様子はない。患者用の服とコート一枚、そして病院用のサンダルを履いているだけの齊木はもはや死人と言っても過言ではないほど蒼白な顔色をしていた。だが、彼は諦めない。陣内に肩を貸してもらいながら、何とか歩いている。

「頑張れ、齊木。あともう少しで街に入る」

陣内の言葉通り、十分もしない内に、だんだん街の様子がはつきりしてきた。もう夜明けだ。

齊木は言葉を失った。 これのどこが『街』なんだ？

道端にはゴミが散乱し、家の屋根は崩れ落ちている。未だにしている外灯はほとんどない。眼を光らせた野良猫が道を闊歩している。痩せた野良犬がゴミを漁っている。日本ではほとんど見ることもなかったホームレスが点在している。ここは、齊木の知っている日本ではなかった。

その時、街中に響き渡ったのではないかというくらいの怒鳴り声が聞こえた。

「失せろっ、このクソガキがあ！！ いつも店の商品くすねやがって！！」

続いて乱暴に扉が閉まる音。

「これは……」

齊木は目の前で起きていることから目が離せなかった。信じられないものではなかった。陣内は彼の言葉を引き継ぐように言った。

「現実だ、齊木。これがお前の知りたがっていた『現実』なんだ」

道端に転がり出てきたのはまだ幼い少女だった。彼女は店主に蹴られた腹を庇いながら、何とか立ち上がる。

「関わるな」

陣内は低くくぐもった声で言った。

「関わりと厄介なことになる。……同情はするな。これが暗黙のルールだ」

少女に手を差し出そうとした齊木は寸の間で手を止めた。彼が、陣内が何を言っているのか分からなかった。

「君は」

齊木は息を飲む。

「君は、いつからルールにこだわりを持つようになったんだ？」

僕の知っている陣内はこんな奴ではなかった。困っている人を見捨てるなんてこと、絶対に。

すると、陣内は俯いて言った。

「あの時、お前も言っていただろう？ ……変わったんだ、何もかも」

「違う!!!」

気付くと僕は叫んでいた。陣内が驚いてこちらを見たのはもちろんのこと、他の人たちも険しい目つきで僕を見ていた。けれども構っていらなかった。

「変わったんじゃない。何もしくなくなったんだ。……全てを政府のせいにして、僕らは現実を見ようとしなさい」

「そんなことはないさ。悪いのは政府だ。奴らが県という制度を廃止し、地区制度にしたから土地争いが起こったんだ」

現在、日本は県制度を廃止して10000個の地区に分けている。あまりにも狭すぎた土地の中で、彼らはこう考えた。『そうだ、県

制度を復活させれば良いんだ』と。だが、反対する人間も当然いる。そして内戦が始まった。

狭い土地で何ができるかということは大きな問題だが、日本はそれよりも重大な問題を抱えていた。

ロシアとアメリカの戦争。そしてそれには中国も参戦している。周囲の国々が争う中、いつ日本が侵略されてもおかしくない。そう考えた日本政府は、国民をある事柄に基づいて各地に散在させたのだった。

その時、少女が動き出す。

「助…ケテ……」

彼女は確かにそう言っていた、斉木を見て。

「どちらにしろ」

斉木はきつぱりと陣内に言い切った。彼はもう迷わなかった。

「僕は、僕が正しいと思うことを貫くよ」

陣内は深いため息をついた。

「分かった、お前の好きにしろよ」

けどその前に、と話は続く。

「まずは服くらい買って行け。本当に死ぬぞ」

「確かに。ごもつともな意見をありがとう」

齊木は服屋に入った。物価は変わっていないことを知り、少し安堵する。彼はポケットから金を出す。すると、周囲の目が異様な輝きを帯びながらこちらに向けられた。

「金だ……！ カネだあ……」

「おい、オレにもカネをくれえ……！」

齊木はそれらをなるべく見ないようにしながら店を出た。外で陣内が待っていた。彼はにやりと笑って「どうだ、お前が知っていた世界とは違うだろ。楽しかったか？」と言った。「まあね」と齊木もにやりと返す。

「それじゃあ行こうか」

そう言って、齊木は少女の手を取る。

「おい、そいつも連れていくのか？」

齊木は理解できないといった様子で「だって、可哀相じゃないか」。陣内は苦虫を潰したかのような顔をした。

「知っているか？ 一人に同情すると他の奴らも助けないといけないんだぜ」

「分かっているよ。それも」

鉛色の空。山にいた時よりも戦争の音ははっきりしていた。

戦争は続く。今日も、明日も、きつと明後日も。

「交代の時間だ、陣内」

銃を担いで塹壕に戻ってきたのは鑄^{しゅう}浚^{じゆん}木^きだった。鑄浚木は深く溜息をついて座れそうな場所に腰をかける。彼は全身ぐしょ濡れだった。「普通、雨の日に戦争なんてやるか？」

「仕方がない、政府の命令なんだ。戦争は何も生み出さない」

「いきなり何を言い出すんだ。政府を嫌っている奴がよ」

鑄浚木は怪訝な表情を陣内に向ける。

「親友の口癖だよ。もつとも、奴も昔誰かにそれを教えてもらったそうだけどね」

「はん、めでたい奴らだな。戦争は何も生み出さない、だって？死んでいった仲間に聞かせてやりたいぜ。もし生き返ったとしたら、奴らきつところ言っぜ。世の中はそんなに甘くないってな」

陣内は彼の言葉を背中越しに受け止めながら、立てかけておいた銃を担ぐ。

世の中はそんなに甘くない、まさにその通りだ。

「お前本当に凄いな」

後半地区兵に狙いを定めた陣内が、隣にいる斉木に声をかけた。

この国はいくつもの地区で分けられている。地区番号は0から9999まである。0地区は政府の人間が住んでいる。彼らは戦うことをしない。これはあくまで噂だが、この戦争は政府が引き起こしたのではないかと言われている。色々言いたいことはあるだろうが、これは議論していても仕方がないことだ。

1から5000地区までの兵士は前半地区兵と呼ばれ、5001から9999までの兵士が後半地区兵と呼ばれる。つまり、一国に住む僕らは前半地区と後半地区に分かれて戦争をしているわけだ。

「凄いつて、何が？」

僕と陣内はほぼ同時に引き金を引いた。僕の弾丸は後半地区兵に当たったが、彼が放った弾はどこかへ流れていつてしまった。

「銃の腕前だよ。お前がどうして馬鹿な後半地区兵どもと銃剣を突き合わせているのか分からない。お前なら少佐にも中佐にも何だつてなれたはずだ。病人ということが惜しいところだな」

病院を抜け出した僕にはもちろん、赤紙が届いた。

「いいんだよ。僕は責任が大きい仕事はしたくない」

「そう思えるお前が羨ましいよ」陣内は吐き捨てるように言った。
「ああ、早く帰りたい。そうしたら、残してきた妻と子供にクリスマスプレゼントをやるのにな」

「妻？ 子供？ 結婚してたの？」

驚く僕に、陣内はにやりと笑って「比喻表現だよ。妻つてのは、俺の恋人。子供はあそこに残してきたガキのことさ」。

陣内は叶わない夢を語る。

僕は唐突にあることを思い出した。

「知っているかい。十二月二十五日はイエス・キリストの本当の誕生日じゃないんだぜ。十二月二十五日つてのは、人間が勝手に決めた休日さ」

「え？ 何だつて？」

機関銃の音が鳴り響く。味方が放ったものか、敵が放ったものか

は分からない。

人間の都合なんて関係ないと言わんばかりに雨は降り続いていた。

a n o m i n o u s d r e a m

「内っ！ 陣内っ、しつかりしろ！」

齊木が必死に呼びかけているのが聞こえた。

「うっ……！」

陣内は後頭部に鈍い痛みを感じた。そこに手を当ててみると、ベ
つとりとしたものが付着した。

雨は降っていない。空も青空だ。そして何より、ここは戦場でな
かった。

「何が起きたんだ……？」

さっきのは夢だったのか。不吉な夢だ。

「陣内……。まさか、覚えていないの？」

「お前が服屋を出た後からな」

先程の少女が陣内を心配そうに見ているのが目に入った。新しい
服に着替え、髪を切り揃えた彼女はもはや『不潔』という言葉は当
てはまらなかった。

「あれから僕らは次の街に行こうとしていた。でもその時運悪く
……」

齊木は歯切れ悪く言葉を切った。どうしたんだ？ と陣内が尋ね
る前に、少女が口を開いた。「びょうきのお兄ちゃんが口から血を
出しちゃったの」

「何だって？」

それ見たことかと陣内が齊木を見やると、彼は申し訳なさそうに
話を続けた。

「それが、街のみんなの気に障ったみたいだ。僕が患っているの
が血液感染する病気だと思っていたらしくてね」

「何っ？」

そんなことを言った奴をぶん殴ってやると一歩踏み出したところ、

斉木に止められた。

「大丈夫。もう分かってくれていると思うよ。君が彼らの誤解を解いてくれたんだ」

「俺が？」

記憶にないので、何とも不思議な気分だった。

山の上の病院にて。

「どの患者が逃げたんんです？」

医師は看護婦に尋ねた。看護婦は何も言わなかった。その代わり、脱走した患者のぶ厚いカルテを差し出す。

「『斉木和也』か……」

医師は深い溜息をつき、カルテをぺらぺら捲る。そのカルテにはびっしりと文字が書き込まれていた。

医師は彼が病院に運び込まれた日のことを思い出した。あの日は蒸し暑かった。

穏やかな午後が過ぎ去ろうとしていた。全ての患者の検診を終え、休憩に入ろうとしていたその時だった。

「先生っ、急患です!!」

声と共に担架に乗せられて運ばれて来たのは十七、八くらいの青年だった。外傷がないことから、持病を患っているのかと彼は推測する。しかし。

「これは一体どういうことだ……?」

「さつきはすまなんだなあ、兄ちゃん。お詫びと言っちゃあなんだが、今日一日ここでゆっくりしていつてくれや。街一番の宿屋を紹介してやるけん」

人当たりの良さそうな老人は、本当にすまなさそうな顔をして僕らを宿屋に招き入れた。どうやら彼は宿主らしい。

自称・街一番の宿屋は、確かに他の建物よりはまともだった。けれど、ところどころ壁紙が剥がれているのが目立つ。申しわけ程度に観葉植物が植えられていたが、どれも元気がない。床はみしみしと音を立て、腐敗具合を知らせている。

「国の象徴だな、こりゃ」

陣内は呆れ気味に吐き捨てた。あまりにも無遠慮な音量だったので、僕は宿主に聞かれやしないかと焦ったが、それは杞憂に終わる。

「なあ、斉木」

唐突に陣内が言った。「これから先、そのガキはどうするんだ？」
彼が言う『そのガキ』とは、無論あの少女のことである。

「何とかしなきゃ、死ぬまでついてくるぜ」

同情しないというのが暗黙の了解、らしい。僕には理解できないが。とにかくそういうルールがあるからこそ、同情された人間は同情した側の人間の傍にいたくなる。自分の安全が保障されるまで。

「わたし、めいわく？」少女が言った。

「そんなことないよ」

僕は彼女が傷つかないように、慎重に言う。だが結果的に、上手く言えなかった。

「ううん、たぶんちがう。お兄ちゃんは、困っている。あ

「うちにいるこわいお兄ちゃんも、たぶん困っているんだね」

まともな教育を受けていないせいかな、彼女も宿主も何とか言葉を思い出そうとするかのように一言一言区切って話す。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。何が間違っていたのだろう。何も知らなかった僕は、その答えを見つけることができない。

いつか病室で読んだ本の中に、砂漠を旅する人の物語があった。

旅人。僕はその言葉に強く惹かれた。彼らは一切のしがらみもなく生きてゆける。僕は旅人になりたかった。

「ありがとう、もう行くよ」

少女はにこりと笑って去って行った。僕らはお互いの名を知ることもなく　もはや知る必要はないのかもしれない　利用し合って生きていくのだ。

s o m e d a y s h i n n i n g s t a r w i l l f a i l . (前書き)

早く女の子を出したいです (T—T)

s o m e d a y s h i n n i n g s t a r w i l l f a i l .

砂漠に生きる人間は生きていくことに誇りを持っている。

瓦礫の中で生きる人間は、すでに生きることを諦めていた。

「なぜ戦争が起こってしまったんか。それが分かれば、戦争なんて起こらんわ」

マイクは愛用の銃を点検をしながら淡々と言う。

「いつ日本に来たんだい？」

彼がアメリカから電話をかけてきたのは、そう前のことでないはずだ。彼は一瞬だけ顔を上げ、「ここは寒い国やな」と言った。僕の質問には答えなかった。

「冬だから」

僕は、彼の独白とも言える言葉に対して答えた。けれど、寒い理由はそれだけではないことを僕は知っている。

かつての日本は温暖化が進んでいた。今は違う。まるで氷河期のようにだ。秋でも春でも、夏でさえ寒い。なぜか。空全体が雲に覆われているからだ。青空なんて、滅多に拝めるものではない。

「神は俺らを見捨てたんか？」

誰に言うわけでもなく、聖書か何かに出てきそうな台詞を彼は口にした。僕は答えなかった。

星は嗤^{わら}う。雲の上から下界を見下ろし、愉快げに笑っている

。「星は笑わないぜ」

そう言って、斉木は俺の隣に腰を下ろした。夜の石階段はやけに冷たい。

俺は時計を見た。午後十時。砲弾の音がうるさくて寝れやしない。こつしたストレスが溜まって人々は壊れていったんだろつな。

「彼らは笑うんじゃない、見向きもしないのさ」

眠気など微塵にも感じさせず、斉木はとうとうと語った。何を分かったようなことを、と俺は言う。すると、斉木はわざとらしく肩を竦めて「全てを分かっている人なんていないよ。神様ぐらいだ」。

「神なんていない」

「ああ、確かに。信じていないのなら、神はいない。けれど彼は信じているみたいだよ」

「彼？」

「あそこにいるじゃないか」

斉木は瓦礫の山を指した。目を凝らして見ると、そこには確かに人がいた。俺の知り合いだった。いや、ここは『俺たち』と言うべきか。

「神を信じる三流ミュージシャンか。奴にはお似合いだな」

「俺も己が一流だとは思ってへんわ。けどな、せめて三流ミュージシャンやのうてアイドル言うてくれへん？ 自分で言うのもなんやけど、これでも母国で売れとるんやで」

いつの間に来たのか。マイクは不機嫌を露わにして目の前に立っていた。

「相変わらずの地獄耳だな」

「ジゴクミミ?」

どうやら聞いたことがないらしい。面倒なことになりそうだったので、放っておいた。明日は早くここを出るつもりだったので、半ば強引にでも寝なければ身が持たない。何しろ、明日行く場所は

「あんだ、若いのに中身はじいさんやもんな。先に寝とっていいで」

「『じいさん』は余計だ」

「いでっ!!! 何すんねん!?!」

明日行く場所は、戦場だ。

「明日行くところは戦場だ。気を引き締めておけよ」

陣内はそう言うと、宿に戻って行ってしまった。マイクは殴られた頭をさすりながら宿に消えた陣内を睨む。

「昔つから変わらへんな、あいつ。人のこと何だと思ってるんや」
マイクはそう言うと気を取り直すかのように、壁に立てかけていたギターを手に取った。古ぼけたギターケースがアスファルトの上に置かれている。彼は聞き覚えのある曲を奏でた。優しく、そしてどこか哀しい曲だった。孤独という言葉が一番当てはまるような気がした。

「『星に願いを』?」

僕は曲名を口にする。マイクは頷いた。「……今の日本にぴったりの曲だと思わへんか?」

月が出ていない。外灯だけが唯一の明かりだった。

孤独。マイクの言うように、今の日本は孤立しているのかもしれない。世界の中心からはじき出された日本。それはまるで鼻を折られたピノキオのようで。

ピノキオはたった一人、どんな気持ちだったのだろう。

「大丈夫か? サイキ」

どれくらい経ったのだろうか。ふいに声をかけられた。

「ああ、大丈夫だ。……?」

心配される覚えはないが。そう言うと、マイクはハハッと笑った。

「ちやうちやう、病気のことやないわ。そんなところで寝とって大丈夫か言いたかったんや」

……気付かなかった。なるほど、僕は寝ていたのか。

「ちなみにどれくらい?」

「ざっと見積もって三十分くらいやな。あまりにも気持ち良さそうに寝とったもんで、起こしたるの可哀相でな、声かけづらかった

わ

「悪いね。放っておいてくれても良かったのに」

「放っておいたら、お前さん死んでまうがな。構わへんよ、それくらい」

『構わへんよ』。その言葉を昔どこかで聞いたことがあるような気がした。僕がそう言つと、マイクは暫く考えて「それ、俺たちが初めて会った時のこととちやう？」。

そうだった。思い出した。あれは数年前の夏のことだ。

数年前。僕はその日、ヤコブのレポートの手伝いをしていた。牢獄の謎かけをし、それをレポートにまとめてみれば？ と提案したのだ。『実際に見聞きしたこと』を思い出して言ってみただけなのだが、ヤコブはすぐに飛びついた。

簡単に説明すると、牢獄の謎とはこうだ。ある探険家が仲間と共に、過去に使用されていた牢獄を観光しに行った。探険家は一人で牢獄の中に入る。仲間は探したが、一向に見つからない。探険家は消えてしまった。けれど、これは何の謎でもない。考え方を変えれば分かる話だ。探険家は消えたのでなく、殺された。仲間によつて。

では、どうして僕がこの話を知っているのか。それは、僕がその時その場にいたからだ。もちろん、探険家の仲間ではない。彼を殺してなどいない。はっきり言おう、僕は被害者だった。怪我をする程度で済んだけれど、探険家の仲間は僕をも殺そうとしていたのだ。牢獄で起きた事件は、探険家が消える。いや、殺されただけでは終わらなかった。ここから先は、ヤコブにも話していないことだ。

。ここから先の話は、レポートに記すにはあまりにも残酷過ぎた

日本。

「気をつけるよ、サイキ。森を舐めている奴は命を落とすんだぜ」
「転びそうになった僕を見かねたのか、先頭にいたカイルは立ち止まって言った。森は傾斜が激しく、歩きにくいところが多かったが、彼は真つ直ぐな道を歩くかのようにすすいと先を行ってしまふ。」

カイル、アンジェリカ、レイン、僕の四人は鬱蒼とした森の中を歩いてきた。この森に詳しいのはカイルだ。カイルは何度もこの森に訪れたことがあるらしい。

いや、そうじゃない。この森を抜ける道を知っているのは、もはやカイルしかないのだ。

僕らをここまで導いてくれた探険家はいなくなってしまった。僕の推理が正しければ、彼はすでに殺されている。彼らの手によって、なぜ彼らは探険家を殺したのか。疑問は残る。手口は分かったが、理由が分からない。

「どうして彼は消えてしまったのかしら」
アンジェリカは蒼ざめた顔をして言った。僕にはそれが嘘であるかのように見えた。いや、実際彼女の言うことは嘘だ。彼女は真相を知っている。

レインは これもまた、演技なのだろう 気味が悪そう
に「消えたなんて言うなよ。人が消えるわけがない」と言った。
太陽が沈む。

「今日はここまでだ。テントを張ろう」
カイルはそう言うと、返事を待たずにテントを張り始めた。冗談じゃない、とアンジェリカが吐き捨てたのを僕は聞き逃さなかった。けれど、カイルには聞こえなかったようだ。レインは彼女を宥めようとしている。

カイルたちは留学生だった。一般人が自由に出入りできる牢獄が日本の森の中にあるということを彼らは知り、興味を持った。そして、そこに行ってみようということになった。英語が喋れる日本人ということで探検に誘われた僕はやはり興味をそそられ、ここまでやってきたのだ。ちなみに、全ての会話は英語である。それにしても、まさかこんなことになるとは思わなかった。

翌朝。僕が目覚めると、レインはすでにいなかった。

「おはよう、サイキ。よく眠れた？」

アンジェリカだ。昨日の不機嫌はどこに行ってしまったのか、彼女は清々しい表情をしていた。

「まあね。レインは？」

僕はアンジェリカに尋ねる。彼女とレインは恋人同士だ。もしかしたら、行き先を彼女に告げているかもしれない。

「さあ、知らないわ。私が起きた時はもういなかったもの。カイルなら知っているんじゃない？」

Who didn't forgive it .

レインは死んでいた。首吊り状態で。

「レインっ！」

アンジェリカは彼の元へ駆け寄った。

レインは驚きに満ちた目を見開いていた。眼球は乾いていた。確認するまでもなく、彼は死んでいた。アンジェリカはレインの足元で崩れ落ちる。

「どうしてっ……！ レインっ……！」

途方に暮れるアンジェリカを気遣いながら、カイルは言った。「ひとまず彼を降ろしてあげよう」

「自殺……なのかな」

僕は恐る恐る死体を見た。外傷はない。だが、カイルは険しい目つきをしていた。どうしたんだと声をかけると、彼はある重大なことを指摘した。

「首吊りで自殺する場合、縄の痕は斜めになるんじゃないか？」

何かを考える間もなく、僕は死体に目をやった。縄の痕は。

「水平だ……」

つまり、誰かがレインを殺したということになる。誰か？ そんなの決まっているじゃないか。

「あなたたちが殺したのね！」

アンジェリカは喚き叫んだ。彼女は恋人を失ったあげく、殺人の可能性があると取られて取り乱していた。

「落ち着け、アンジェリカ。俺がレインを殺すわけないだろう。それに、知り合ったばかりのサイキが彼を殺す理由もない」

「レインが自殺したって言うの？ そんなわけないじゃない、彼は殺されたのよ！ あなただってそう言ったわ！」

「殺されたとは言っていない。それに、俺たちの中に犯人がいるとは限らないだろう？」

カイルの言うことはもつともだった。犯人がこの中にいるとは限らない、確かにそうだ。……可能性は極めて低い。もしも、この中に犯人がいなかったとしたら。

「あの人よ……。あの人を殺したんだわ！ 消えたと見せかけて彼を殺したのよ、そうに違いないわ！」

彼女が言う『あの人』。探検家のことだ。探検家が生きている？ まさか、そんなはずない。それとも、僕の推理が間違っていたと言うのか？

「とりあえず、今までに起きたことを整理してみないか？」

僕は何も分からないまま話を切り出した。彼らを落ち着かせるためには話し合いをさせることが一番だと思った。

「まず、探検家が牢獄で消えた。どこを探してもいなかった、それは確かだね？」

牢獄内は暗かった。起伏の激しいところを歩いた経験がない僕は足元ばかりを見ていたので、本当に探検家がいなかったのか分からない。探検家が目の前にいたにも関わらず、声も出さずに死んでいく探検家が目の前にいたかもしれないことに僕は気付けなかったのかもしれない。

二人は強く頷いた。「いなかったよ、どこにも」

「そして、翌朝　　つまり今日　　レインは何者かに殺された」

僕がそこまで言うと、アンジェリカは下唇を噛みしめて俯いた。

カイルもやるせない表情を浮かべている。

その時、僕はあることに気付いた。もしかしたら犯人はあの人に好意を抱いていたのではないか。

「コーヒーいる？ インスタントだけど」

そう訊かれ、僕は頷いた。

答えは夜になれば分かるはずだ。

夜。

僕は昨日のようにテントを張っていた。僕は寝たふりをしていた。

どれだけ経ったのか分からない。はっと気付いた時には、人の心配がしなかった。……寝ていたのか。気を配っていたつもりだったが……。そういえば、身体がだるい。しまった、睡眠薬か！

コーヒーに入れられていたのだろう。僕はテントから飛び出した。暫くして、外の暗さに目が慣れてくる。辺りを見渡すと、他よりも暗い部分があった。人影だ。一つは立ち姿で。もう一つは、地面に横たわっていた。

「やっぱり君だったんだね」

僕は人影に話しかけた。

『コーヒーいる？ インスタントだけど』

『森を舐めている奴は命を落とすんだぜ』

「君が彼らを殺した。」

「そうだろうか？」

「カイル」

僕の言葉に反応するかのように、カイルはゆっくりとこちらを向く。手にはナイフが握られていた。血が滴り落ちる。

「どうして皆を殺したんだ」

カイルは、たった今殺したアンジェリカの死体に目を向けた。何の表情も浮かべていなかった。

「俺が、アンジェリカを好きになってしまったからだ」

鋭い刃物のような口調だった。

「何も殺すことはないだろう？」

「いいや、殺さなければならなかった。彼女が歳を重ね、老いていくなど俺には考えられない。彼女は美しいまま死ぬべきだった」

「けれど、殺せば死んでしまう」

「殺せば死んでしまう」彼は言葉を反芻した。それはまるで詩を口ずさむかのようで。

「そうだ、それは当たり前のことだ。だがそれでも良かった。彼女が死んでしまっても、記憶の中の彼女は永遠に美しい」

わけが分からない。彼の言っていることの全てが。

「……レインたちを殺す必要はなかったんじゃないか？」

僕は混乱していた。彼は、カイルは、目の前にあるものではなく記憶に残せるものを選んだのだ。

カイルはまたもや否定する。

「レインは彼女を愛してなどいなかった」

「え？」

「彼が本当に愛していたのはアリアだ」

アリア。

牢獄で、彼の手によって殺された探険家。

「こともあろうか、レインはアリアを好きになってしまった。アンジェリカはそのことに気付いていなかった。俺だつて知らなかった。だが、俺はある日アリアに相談されたんだ。『レインが言い寄つてきた。私はレインが好きだった。けれど、彼にはアンジェリカがいる。カイル、私はどうすればいいの？』とな。アンジェリカにはレインが必要だった。彼女が悲しむのは目に見えていた。レインはアンジェリカを裏切り、アリアは俺を裏切った。だから殺した」

カイルはさらりと言いのけた。ゲーム好きの少年が、やり尽くしたゲームの雑魚キャラを倒した時のように。

ふと疑問に思った。彼がなぜこうも簡単に罪を認めるのか。

彼は僕を生かして帰さないつもりなのだ、この森から。

「お前を巻き込むつもりはなかった。だが、アンジェリカがお前を誘いたがった。真相を知つたお前を生かしておくわけにはいかない。悪いな、斉木」

カイルはナイフを振りかざす。月光は、銀色の刀身に付着した血をよりいっそう不気味にさせた。避けられる距離ではなかった。僕は死ぬ覚悟をした。けれど、いつまで経っても死に伴う痛みが訪れない。僕は恐る恐る目を開けてみた。

「カイル!!!」

彼は死んでいた。自らの喉を切り裂いて。

彼がどうして僕を殺さなかったのか。それは未だに分からない。それでも、惨劇は終わった。何とも言えない複雑な気持ちを僕に刻み込ませて。

profile (前書き)

『the engel became a devil in a
church on Sunday afternoon.』の章
でてくる人物の紹介です。人数が多くなったので(^^ゞ

profile

名前：斉木 和也

年齢：???

備考：世界中を旅している。旅人。

旅をする資金がどこにあるのか不明。

どうして各国の言語を喋れるのかも不明。とにかく謎に包まれている。

名前：アルテミス・シャープブルック

年齢：十歳前後

備考：第一人称が『ボク』。少年っぽい格好をしている女の子。イザベラ様を尊敬している。

名前：イザベラ

備考：修道長。優しいが、厳格な性格をしている。

名前：ヴィネ

備考：修道女。おっちょこちょい。

名前：キアラ

備考：修道女。気性が激しい。

名前：ルイーザ

備考：修道女。おっとりしている。

「浮かない顔をしているな」陣内が僕を見て言う。

「久しぶりに夢を見てね」

「夢？」

「ああ。だけど、あまり良い内容ではなかったよ」

森で起きた、狂氣的な殺人。レポートに記すにはあまりにも残酷で、思い出すと精神を蝕まれるような思いをする。だが、僕がそのことを思い出すことは少なかつた。

「ここが戦場なんか？」

マイクは明らかにがっかりしていた。

ここに兵士がいることはない。ここは、かつての戦場だったからだ。人が住んでいる気配はもちろん無く、緑もない。でこぼこした地面が地平線まで続いている。

「地球にクレーターってあったっけ」

僕は地面にいくつもの巨大な穴が空いているのを見て軽い冗談を言う。陣内は肩を竦めて「クレーターではなく、地雷の跡だな」と言った。

「ここにはまだ地雷が埋まっているらしい。だが、次の街に進む道はここしかないんだ。避けて通るしかないな」

陣内はどこから持って来たのか、金属探知機を僕らに渡した。

次の街。その時、僕は疑問に感じた。どうして先に進む必要がある？

「お前……何も覚えていないのか？」

「え？」

それはどういうことだ……？

「死んだらどうなるのかな」

少女は語りかける。

「もし死んでしまったら、私は天国に行けるのかしら」

誰に訊くわけでもなく、彼女は窓の外を見て言った。

何も無い真っ白な部屋。消毒液の独特な臭いが蔓延する。僕はこの臭いが大嫌いだっただった。

「天国なんて」

僕はそこで言葉を切った。わざわざそれを言う必要がなかった。

彼女はくすりと笑った。そして、僕が言いかけた言葉を続ける。

「『あるわけがない』？」

「否定するわけではないよ。けれどももし天国があつて、神様がいるのなら」

彼女はもう外を見ていなかった。彼女の瞳は輝きを失っている。

「僕らがこんなところに閉じ込められているはずがない」

僕は彼女を助けたかった。

「先生！早く来てください！！」

七、八人の看護婦が一つのベッドの周りに集まっていた。その中心には、逃げ場を失った青年がいる。彼は身近にあるもの全てを看

護婦たちに投げつけていた。

「僕をここから出せ！」

青年は叫んだ。何とか看護婦たちを振り払おうともがくが、雁字搦めにされて身動きが取れない。

「ここから出せっ！！ 僕は病気なんかじゃない！！」

「先生ッ、早く薬を！！」

「待っている、すぐに投与する」

医師は白衣のポケットから注射器を取りだす。それを見た青年は、よりいっそう激しく抵抗した。

「嫌だっ……！！ やめろ！！」

虚ろな瞳の中に初めて一つの感情が浮かぶ。彼は感情に任せて喚き散らすのを止め、逃げようとした。その言葉通り、純粹な恐怖によつて逃げようとした。だが、逃げられない。

医師は慣れた手つきでキャップを取り、青年に薬を投与した。そして、低い声で告げる。

「君は重い病にかかっているんだ。私たちでは施しようのない病に」

夏。僕は外国にいた。

どこに向かうわけでもなく、ふらふらと街を歩いていた。

刻々と近づく帰国日。家に、いや日本に帰りたくなかった。あそこは、あの場所は、目まぐるしいスピードで時が流れている。周囲にいる人の声がるまるで異国語のように聞こえた。彼らがどこか遠くで喋っているのではないかという錯覚さえあった。

僕は信じていた。今いる場所だけがこの世の全てではないのだと。

「日本人？^{ジャパニーズ} 君、日本人だよな？」

どうやら声をかけられたらしい。それに気付くまでに数秒かかった。

物珍しげに目の前ではしゃいでいるのは、十歳くらいの少年だった。

信号が青になり、人の群れが一斉に動きだした交差点。誰もが急いで目的地に向かっていてその中で、僕ら二人は浮いていた。

「君くらいの歳の日本人なんて、久しぶりに見たよ。あ、ボク『アルテミス』って言うの。アーティって呼んでね」

アーティは物凄い勢いでまくし立てた。その後にも何か言っていたが、あまりにも速かったため、ほとんど聞き取れなかった。

「アーティ、悪いけどもう少しゆっくり喋ってくれ」

アーティは快活に笑った。

「ああ！ それは悪かったね。気をつけるよ。　そういえば、

君の名前は？」

『名前』。

「……斉木」

「？」

「斉木和也だ」

アーティはにっこり笑う。屈託のない笑顔だった。

「カズヤつ、ボクと一緒に遊ぼう！ ボク、面白い場所を知っているんだ！」

「え？ あつ、ちょっと待ってよ！」

僕は彼に引きずられるまま、その場所を後にした。

「イザベラ様って知ってる？」

「イザベラ様？」

「修道長だよ。ボクは毎日礼拝堂に行っているんだ。ほら、その丘のところにある建物だよ。見えるでしょう？」

アーティは小さな建物を指した。入口には十字架が飾られており、そこから見上げると金色の鐘が垣間見える。

「元々お祈りをしに行こうと思っていたんだ。そうしたらカズヤに出会ったんだよ。さあ、行こう」

「でもアーティ、僕は宗教のことに詳しくな」

「大丈夫！ イザベラ様はとても優しい方だからね。ボク、イザベラ様を尊敬しているんだ！」

アーティは礼拝堂の門を推した。ギィィと音を立てながら、門は内側へと動く。

「おや？ 今日はお友達も一緒なのですね」

僕らを迎えたのは、にこりと微笑んで頬に皺を刻んだ女性だった。彼女は眼鏡をかけている。レンズの奥にある瞳は間違いなく、慈愛に満ちていた。

「彼女がイザベラ様だよ」

アーティは自慢げに言った。

「斉木です。日本から来ました」

「まあまあ、遠いところからわざわざ……。大変だったでしょうね。Ms・シャールブルック、一緒に礼拝堂の中を斉木さんに案内してあげましょう」

「もちろんですつ、イザベラ様！」

アーティは目を輝かせてイザベラ様を見た。ちなみに、アーティの本名は『アルテミス・シャールブルック』だ。

ん？ そう言えば……。

「恐れ多いのですが、イザベラ様」

僕はイザベラ様に尋ねた。「あなたは先程、アーティのことを『Ms・シャールブルック』と言いませんか？」

するとイザベラ様は不思議そうに首を傾げ、「はい、言いましたよ。それが何か？」。

僕が何を言いたかったのかアーティは分かったようで、拗ねたように頬を膨らませて「ボクは女のコだよっ！！」と言った。彼女の髪はプロンドのショートカットで、格好はオーバーオールというラフなものだった。

「ごめん、アーティ。気を悪くしないでくれ」

「仕方ない、正直なことに免じて許してあげるよ。……それにしても鈍感だなあ、カズヤは」

アーティは呆れたように、やれやれと肩を竦めた。

「斉木さんの誤解も解けたようですし、そろそろ行きましようか」
イザベラは、彼らがおもっている間も微笑みを絶やさなかった。

i n a c h u r c h

「イザベラ様っ！」

前方から一人の修道女が駆けて来た。

「何ですか、騒々しい。お客様の前ですよ」

イザベラ様は表情を曇らせて彼女をたしなめた。

「あっ……」

修道女ははっとしたように僕らを見る。

「失礼しました。どうぞ、ごゆっくり……」

すぐごと帰って行く修道女に、構わないよとアーティが言った。

「だって、急いでいるんでしょう？」

「そうなのですか？ ヴィネ」

彼女の名はヴィネというらしい。彼女は頷いた。

「はい、実は」

ヴィネはイザベラ様に歩み寄り、小さな声で何かを告げた。イザベラ様は難しい顔つきになり、唇を噛みしめる。

「分かりました、私が手を打っておきましょう。その代わりにヴィネ、あなたは私の代わりにお客様をご案内して差し上げるのですよ。いいですね？」

「はい、イザベラ様」

「先程はどうされたのですか？」

僕は彼女に尋ねた。

「あ、いえ……。特にこれと言ったことはありません」

目が宙を泳いでいる。ヴィネは嘘をつくのが下手だった。アーティがそれを指摘すると、彼女は頬を赤らめて「お二人は、神様を信じていますか？」と訊いた。つまり、信者かそうでないかと言いたいのだろう。だが正直なところ、僕はそのどちらでもない。どう答えるべきか考えていると、アーティが困ったようにしているのが見えた。けれどアーティはそれをそのまま口にした。

「ボクは神様を信じているよ。でも、妄信的ではないな」

「そうですか。そちらの方は？」

「大丈夫だよ、ヴィネ。カズヤは日本人だ。日本人は無教徒だつて聞いたことがあるよ」

僕が答える前に、アーティが言ってくれた。

「……そうですか。それなら話しても大丈夫ですね」

彼女は周囲を見渡し、近くに誰もいないのを確認すると声を潜めて言った。

「ここだけの話ですけど……。最近、物がよく盗まれるんです」

「泥棒か」

僕は思わず声に出してしまった。

「ドロボウ？」

アーティは不思議そうに　　気を使ったのか、小声で　　言

葉を反芻する。発音は怪しかったが。

「泥棒シユフのことだよ。日本語では『ドロボウ』と言うんだ」

「分かった！　だからヴィネは言いたくなかったんだね？　ボクやカズヤみたいな人ばかりがいるわけではないから」

すると、ヴィネは今にも溜息をつきそうな口調で言った。

「礼拝堂は神聖な場所です。ここで盗みが働かれているなど知られたら、穢れ多き疑心が生まれてしまいます。ですから、私たちは内密に対策を立てねばならないのです。イザベラ様はこのことにとってもお悩みになっておられて……」

「不躰な質問だけど、一体何を盗まれたの？ 見たところ、盗まれそうなものは盗まれていないけれど」
アーティが言う。

確かに。僕も不思議に思った。
ヴィネはたった一言。

「蠟燭です」

「蠟燭？」

「ええ。高価なものではなくて、市場に売っている普通の蠟燭です。私たちには、なぜ蠟燭が盗まれるのか分かりません」

僕は『祈りの間』についた。大理石でできている床を歩くと、靴の音が反響する。

ふいにヴェネが声をかけてきた。

「ここがどうして『祈りの間』と呼ばれているか、分かりますか？」

アーティも彼女を見やる。

「ええ。……何となく分かります」

そこには十字架に張り付けられたイエス・キリストがいた。もちろん模型だ。彼は悲痛そうな表情を浮かべていた。上の方の脇腹辺りに刺し傷がある。肢体は釘で打ちつけられていた。あまりにも無残だ。信者でなくとも、祈りたくなるようなものだった。

その時、他の修道女たちが『祈りの間』にやってきた。

「あら、アレッシア。まだお祈りをしていなかったの？」

「ええ。ちよっと色々あつてね」

色々、というのは蠟燭泥棒の件についてなのだろう。ルイージャは顔馴染みであるアーティに「そちらの方は？」と尋ねていた。そちらの方、つまり僕のことなのだろう。

「カズヤだよ！　ボクの新しい友だち！」

「そう、よかったわね。これも神様のお導きに違いないわ」

そう言つて、ルイージャは巨大な十字架を仰ぎ見た。

「そうだ、ヴェネ。イザベラ様がどこにいるか知っている？」

キアラはややきつい口調で言った。彼女は普段からそんなように、ヴェネは気にしなかった。ヴェネがイザベラがいる場所を言つと、

キアラは納得したようにその場を退出した。残されたルイーザは「ありがとうございます。では、「ごゆっくり」とお辞儀をし、彼女の後について行った。

「アレツシア、君は行かなくていいの？」

すると、アレツシアは微笑んだ。

「ええ、ここにいます。皆様という方が楽しいもの」

「だよねっ！」

アーティはつられてにっこりと笑う。するとその時、教会の鐘が鳴り響いた。同時に、門が閉まる音がする。

「何だ？」

アレツシアの顔色が蒼白になった。

「大変！ ああ、どうしましょう……！」

彼女は泣き崩れるようにその場に座り込んでしまった。

「どうしたのですか？」

嫌な予感が過った。案の定、彼女はそれを口にした。

「今日は特別な日だったの。今日はもう礼拝堂の外に出られませ
ん……」

「ボクも？」

「はい。誰であろうと、『忌日』は日没後に外出してはいけないのです。もし外に出てしまえば、災いが一身に降り注ぎ、二度と神の元へ行くことができないでしょう」

ヴィネが言った。

夜。イザベラは戸締まりの点検をするために、ランプを片手に教会の廊下を歩く。懐中電灯ではなくランプを使用しているのは、経費節約のためだ。

イザベラが全ての点検を終えた時、前方から何かが落ちる音がした。

「……………」

イザベラは多少不安になった。

見周りをしたけど、誰もいなかったじゃない。大丈夫よ、大丈夫。

それでも不安はぬぐい切れなかった。彼女は身震いをし、急ぎ足でその場を去った。

翌日、彼女は皆の注目を集めることとなる。彼女はいくつもの蠟燭に囲まれて、死んでいた。

「イザベラ様っ！」

アレツシアはごくりと息を飲んで、ゆっくりとイザベラを見た。死体を発見したのはルイージャだった。

イザベラはうつ伏せで死んでいた。死体は五つの蠟燭に囲まれている。イザベラの背中はずっくりと切り開かれ、真っ赤に染まっていた。そこから白いものが垣間見える。

「アレツシア?!」

倒れるアレツシアを助けたのはキアラだった。キアラは異様な光景を見せつけられながらも、何とか平静を保っていられた。

— 窓 —

— 机 —

— 椅子 —

イザベラ

— 扉 —

「ねえ、これを見て何か気付かない？」

誰もが慄く^{おの}中、彼女はぽつりと言った。

「アーティ……。何かって、何だい？」

アーティはすたすたと死体に近付く。そして、座り込んだ。「蠟

燭の配置だよ」

「蠟燭？」

「うん。ほら、よく見て。星の形をしていない？」

「ええ、確かに。でも反対向きよね？」

ルイージャが言った。この五芒星は正位置に置かれていない。

「一体誰がこんなことを……」

ヴェネは誰に言うわけでもなく呟いた。

「分かったわ！」

キアラは唐突に叫んだ。「イザベラ様を殺した犯人はきっとあの窓から入って来たのよ！」

「窓の鍵はちゃんとかかっていたわ。さつき確認したけれど、他の出入口も全て鍵がかけられていた。きっと、イザベラ様が戸締まりをしてくださっていたのだから……天に召される前に」

ルイージャは最後、俯いてしまった。彼女は声を押し殺して泣いていた。

「安らかに眠りたまえ」

彼女たちは十字を切った。アーティと斉木もそれを真似て十字を切る。

だが、アーティはそれだけで終わらなかった。

「これが自殺ってことじゃないことは分かるよね。だけど、本当に犯人は誰だったのかな」

「犯人なんか、今はどうでもいいでしょう？！ 死者を前にそのようなことを言うべきではありません！」

ヴェネは堪え切れずに叫んだ。彼女は肩で呼吸していた。そうしなければならぬほど、ヴェネは参っていたのだった。

「大丈夫？ アレッシア」

僕は水の入ったコップを渡した。アレッシアは頷いた。

あれから、イザベラの死体を人目につかないよう別の場所に移動させた。床に飛び散った血の痕を消し、蠟燭をどけ、何事もなかったかのようにするには相当の労力を必要とした。掃除が終わった今、ルイージャとキアラは自室で休んでいるそうだ。尊敬していた修道長を失い、誰もかれもが平静さに欠けている。

「アレッシア、教えてくれ。正直なところ、『忌日』って何だ？」

「……その名の通りです。昨日も説明しましたよね？ 災いがやってくるんですよ」

「災いって、具体的にどんな？」

アーティが訊く。彼女は首を横に振った。

「分かりません。私たちは何も知らないんです。ただ、昔からこの礼拝堂にはそういう決まり事みたいなものがあつたんですよ。それに従い、私たちは今日まで生きてきました」

もしかしたら、とヴィネは言った。

「あの夜、イザベラ様は外に出てしまわれたのではないでしょう
か」

だから、災いがその身に降りかかった。

その時、雷の音が轟いた。続いて空が暗くなる。雨の音が激しい。雷雨がやってきたのだ。修道女たちは驚きながらも、慌てて堂内の電気をつけ始めた。

「ヴィネ？」

彼女は身体を丸め、その場に縮こまっていた。

「わ、私、雷苦手なんです」

「へえ、知らなかった！ ヴィネって案外怖がりなんだね！」

アーティは無邪気な笑顔を浮かべた。

「それにしても、どうして蠟燭を並べる必要があったんだ？」

五本の蠟燭。死体を中心に、五芒星を作っていた。

「ペンタグラム五芒星　　「ヴェイネ ヴィネは呟いた。」

「ペンタグラムは、陰陽道では魔除けの呪符として伝えられているのですよね？」

ルイージャはペンタグラムの説明を始めた。

ペンタグラムの印にこめられたその意味は、陰陽道の基本概念となった陰陽五行説、木・火・土・金・水の5つの元素の働きの相克を表したものであり、あらゆる魔除けの呪符として重宝されていた。

「もしかしたら、犯人は魔除けの効果を狙って蠟燭を置いたのではないでしょうか」

謎の蠟燭。なぜ犯人は蠟燭を置いたのか。それに

「盗まれた本数と同じですね」

ルイージャは僕が思ったことをそのまま言ってくれた。

「それが何なのよ。蠟燭なんて、今はどうでもいいことじゃない」
キアラは苛立ちを隠そうともせず言い放つ。

「いや、そうでもないんだ」アーティは不敵に笑った。

「蠟燭を盗んだのも、修道長を殺したのも、全て同一人物が行ったんだよ」

二つの事件は繋がっていたと言うのか。

「分かったよ、犯人が」

アーティは自慢するわけでもなく、小説を読んでふと思いついたかのように言った。

「犯人が分かったって？」

僕が訊き返すと、アーティは頷いた。

「全ては繋がっていた。犯人はイザベラ様を殺す機会を窺っていた。そして、昨日の夜に実行したんだ」

「何も昨日じゃなくてもいいじゃないか。『忌日』だったんだらう？ 犯人が特定し易い時に、どうして」

アーティは一冊の本を僕に渡した。

『聖なる人』

アーティはページを指定した。そこを開いてみると、こう書かれていた。

『聖人はたとえ忌日であろうとも殺されない』。

「まさか……」

「そのまさかだよ。この本は礼拝堂にある机の上に置いてあった。犯人はイザベラ様を尊敬していた。聖人だと思うほどにね。」

だが、証拠がない。犯人は証拠が欲しかった」

「それで、犯人はこの本に書かれていることを試してみたのか……」

死ななければ成功。死んでしまったら。

「聖人であるはずのイザベラ様が死んでしまった時、犯人は途方もない悲しみと絶望に襲われただろうね。そうでしょう？」

アーティは振り返って言った。そこには彼女ほんにんがいた。アーティは彼女がいるのを知っていてこの話を切り出したのかもしれない。

「君がどうして尊敬してやまないイザベラ様を殺したのか、ボクはもう分かっている。君が犯人だという証拠も」

「ふふ。悪いことって、やっぱりバレてしまうものなのね」

彼女は諦めたように両手を挙げた。斉木は絶句した。

「どうして……」

彼女は妖艶に微笑んだ。その微笑み方には見覚えがある。

「どうして私が犯人だと思ったの？」

彼女は犯行を認めた。あまりにもあつさりとしていた。

「ここにはイザベラ様を尊敬している修道女が沢山いた。だから、『聖なる人』の本を見つけた後もボクには犯人が誰なのか分からなかった。けれど君は自ら言ったじゃないか。君が アレッシアが犯人である証を」

『ベンタケラム五芒星』

”彼女は身体を丸め、その場に縮こまっていた。”

”「わ、私、雷苦手なんです」”

”「へえ、知らなかった！ ヴィネって案外怖がりなんだね！」”

”「雷だけはどうしても……嫌いなんです」”

すみません。ヴィネはそう言い、微笑んだ。気にするなよ、と斉木は彼女に言う。

ヴィネ。

彼女の名前は。

「『アレッシア・アントニオ・ヴィネ』。それが私の名前よ。」

顔はベールでほとんど隠れていたし、キアラたちはファミリ-

ネームで私を呼ぶこともあったから、あなたは『ヴィネ』と『アレツシア』という二人の人間が存在していると勘違いしてくれていたようにだけれど」

ヴィネ　アレツシアでもある　　は冷めた目で斉木を見てから、視線をアーティに移した。

「どうやらあなたは騙されなかつたようね」

アーティは肩を竦めた。「君に見惚れていたカズヤと一緒にしないでよ」

「見惚れてなんかいないよ」

「さあ、どうだろうね」

斉木は反論しようと思つたが、止めた。今の論点はそこじゃない。五芒星は魔除けのために使われる。だが、逆さまに描いた時の五芒星は　　。

「君は真つ先に逆さまに描かれていた五芒星の意味に気付いた。だから思わず声に出してしまつたんだ」

「？　蠟燭を立てたのはアレツシアじゃないのか？」

アレツシアは首を横に振る。「いいえ、違うわ」

それなら誰が？

僕の考えを見透かしたようにアーティは頷いた。

「ヴィネ　いや、アレツシアは違う。確かに修道長を殺したのは彼女だ。けれど、彼女は殺しただけだった」

犯人が二人いる……？

「修道長を尊敬し、『聖なる人』を読んでいた修道女はアレツシアだけではないはずだ。けれど、彼女には五芒星を描く必要はなかつた。なぜなら、『聖なる人』に五芒星のことは書かれていなかったからだ。五芒星を描いたのは、修道長が殺されているのを真つ先に発見した人物。そして、五芒星の意味をとてよく知っていた

「

『ペンタグラムは、陰陽道では魔除けの呪符として伝えられているのですよね?』

「ルイージャ、五芒星を描いた人物に当てはまるのは君しかないんだ」

s h e b e c a m e a d e v i l . . . (前書き)

配分がおかしくなっていました(^^)ゞ すみません。

s h e b e c a m e a d e v i l . . .

「くっ……くっくっ！ あはははははっ！！」

ルイージャは狂ったように笑い始めた。

「そうよ、私が五芒星を作ったの。愚かな修道長、イザベラのため
めにね！」

ペンタグラム
五芒星。

五つの要素を並列的に図案化できる図形として、洋の東西を問わず使われてきた。世界中で魔術の記号とされ守護に用いることもあれば、『上下を逆向きにして悪魔の象徴になることもある』。

「私は彼女を本当の聖人だと思っていた。けれど違った。彼女は何者かに殺されていた。修道長を殺したのがアレツシア、あなただとは思わなかったけどね。……とにかく、私は絶望した」

イザベラは神でも天使でも聖人でもなかった。

「だから私は彼女を悪魔にしてあげようと思ったの。盗んだ蝋燭でデビルスターを描いてね」

「デビルスター？」

聞いたことのない単語だ。

すると、アーティが簡単な説明をしてくれた。

「五芒星は悪魔の象徴としてとらえる際、デビルスターと呼ばれることもあるんだよ」

「アレツシアがイザベラを殺した後、背中に傷を負わせたのは私。そうすれば、翼を折られた天使に見るでしょう？」

ルイージャは笑い続ける。

そうか。だからあの時、アレツシアは驚愕していたのだ。死体に、死者への冒瀆とも言える傷が刻み込まれていたから。

「狂ってる！！」

僕は思わず叫んでしまった。ルイージャは笑うのを止めた。

「狂っていることの何が悪いと言っつもの」

その口調はきついものだった。けれど、僕は見逃さなかった。
彼女が哀しい笑顔を浮かべていたということに。

「目が覚めた？」

僕はベッドに横になっていた彼女に声をかけた。彼女は頷き、ゆっくりと起き上がる。暫くして、彼女は思い立ったように窓の格子に手を添えた。彼女の吐く息が窓硝子を白く曇らせる。

雪が降っている外。部屋は薄暗いままだ。いや、どれだけ明るくても僕には暗く感じる。気持ちが沈んでいるからかもしれない。

「ずっとこのままだったら良かったのに」

彼女は哀しげに微笑んだ。

「世界は点と点と点で繋がっているの。もしもこの世に三つの世界があるとしたら、私たちは一つ目の点で生まれ、死ぬ。死んだら二つ目の点に行く。また死んだら、今度は三つ目。そうやって生きていくの。ずっとその三つの世界を巡って行くのよ。どう？ 素敵でしょう」

僕には彼女の言いたいことが分からなかった。

いや、そう

じゃない。分からなくなってしまったんだ。

彼女はあの日を境に壊れてしまった。彼女を元通り戻すことは不可能だった。

「もしも私が死んだら、あなたは悲しむのかしら」

「そういう冗談は嫌いだよ」

彼女はくすりと笑う。

「そうね。あなたは優しいから、正直に『どうでもいい』って言えないのよね。分かっているわ」

違うよ。そうじゃない。

けれど、僕はそれを言うことができなかった。

「私はもう何も見たくないけれど。あなたにはまだ、希望が残っているわ」

彼女の透き通った声は今にも消え入りそうだった。

外の世界に絶望している少女。目を離れた隙にいなくなっ
てしま
いそうなくらい儂げだ。

「あなたはまだ絶望したら駄目なのよ。あなたを待っ
ていてく
れる人がいる」

「無理だよ。僕は……」

『狂っていることの何が悪いと言っ
つ』

何が悪くて何が正しいのか。

『俺は彼女を愛していた。だから殺した』

僕らは何のために生きているのか。

彼女は諭すように言った。懐かしい、もう随分と見せてくれな
か
つたあの笑顔を浮かべて。

「外に出るべきよ。あなたが患っている病気を治す一番の方法は
外に出ることなの」

君だつて同じじゃないか。そう言つと、彼女は意地悪く笑
つた。

「嫌だつて言つのは、許さないから」

彼女は淫らなキスをする。

「ボクのせいだつて思つてもいい。ボクがカズヤをメチャクチャ
に壊してしまつた。全部ボクが悪いんだ。経緯はどうであれ、結果
的にカズヤを精神病院に強制入院させてしまつたんだから」

「……責めるつもりはないよ」

僕は彼女の長い髪を撫でた。

「それなら、ボクのために君は外に出るべきなんだ。でないとならば、君はいつまでたっても前に進めない。それくらい分かっているんでしょ？ カズヤ」

アルテミスは僕の手をきゅっと握る。彼女が心に負った傷は計り知れないものだった。それでも、君は笑っていた。暗い影を落とす。。

h o s p i t a l o n t h e m o u n t a i n a g a i n . (後 書 き)

次話から主人公交代となります。ファンタジー要素入るかもです。

new story(前書き)

主人公が替わります。途中からファンタジー要素が出てきます。ファンタジーが駄目な方、主人公交代が駄目な方は今すぐ逃げてください。

「なあ、推理小説の被害者ってさ、よく『殺さないでくれ!』って叫ぶけどよ」

ヒバリは手にしている単行本から顔を上げて言った。

「どうせ殺されるのに、それを言う必要はあるのか?」

私、霧島美衣奈きりしま みいなはとんでもなく困っていた。なぜなら。

「いい加減にしてくれませんか。お客様が来ていますよ」

応接セットのソファに腰をかけているのはやや俯きがちな女性。

彼女の長い黒髪は重力に従っているため、その様はまるで『サダコ』のようである。

そして、向かいに座っているのは我が探偵事務所の中で最も偉き

探偵様。これはほぼ嫌味。実際に敬っているわけでは全然ない

ので、誤解しないように! サクラだ。サクラはふんぞり返っ

てこそいないが、有難き客人を空気のようにしか認識していないのは確かだ。

「あの、私……。ご迷惑なようなので、帰ります……」

名も知らない客人、通称『サダコ』さんはあくまで控えめに

しかし、明らかにうんざりしたような様子で探偵事務所の扉に手をかける。

「すみません、すぐにこいつをこっちの世界に引き戻しますので少々お待ちいただけますか。サクラ!」

本を読むことに熱中しているサクラを引き戻すのは大変な苦労を要する。

「お困り事がある客人がいらっしやっていますよ！」

……正しい敬語の使い方がどうか怪しいな、私の喋り方は。

すると、サクラは眉間に皺を寄せて顔を上げた。

「その呼び方は止めるって言っているだろ」

「はいはい、分かりましたよ『桜木』さん。それより、仕事をしてください」

「…………ちっ」

この人、今舌打ちしませんでした？ 私の気のせいだよな

？ うん、きつとそうだ。そうに違いない。

「それで？」

サクラは渋々といった様子で読みかけの本を閉じ、サダコさんに声をかけた。サダコさんはいきなりのこと「え？」と当初の目的も忘れ、困惑気味である。

「だから、何の用があつてここに来たんだと訊いている」

おい、あんたなあ……。私は溜息が出そうになった。何なんだ、

その偉そうな態度は。言つとくけどね、あんたが給料を払うんじゃないよ。まあ確かに私に^{アルバイト}給料を払うのはあんただけど、その金を払うのはサダコさんたちだからね！

「実は」

サダコさんはところどころつつかえながら話を始めた。要約すると、こうだ。

サダコさんの本名は『西村春子』。彼女は美容院を経営しているらしい。儲かるわけではないが、お金に困るほど収入がないわけでもない。つまり、そこそこやっていける程度には稼いでいるようだ。ところが最近、十歳前後の子供　それも、近所の子ではないらしい　が用もないのに美容院にやって来ては営業の邪魔をするようになった。

「失礼ですが、その子供に嫌われるようなことを何かなさいまし

たか？」

やっと探偵モードに戻ったサクラは西村さんに訊いた。……まったく、本を読むのはいいつて聞いたことがあるけど、仕事中に趣味に没頭するのはどうかと思うね。

「いいえ。むしろ子供は好きです。嫌われるようなことをした覚えはありません」

「そうですか。では、とりあえず様子を見ましょう。まずはその子の心理を理解することが大切です」

私にはサクラの気も知れないけどね。だって、そう言うサクラもまだ子供なんだよ？ 子供らしくないよねー、絶対。

「ミーナ」

サクラが呼んだ。はいはい、また何か雑用を押しつける気でしょ。

「機材を持って彼女の店に行くぞ」

だろうと思った。

私たちが西村さんに案内された場所は、古めかしい洋館のような建物だった。

「あの……ここが本当に美容院なんですかね？」

私は思わず訊いてしまった。すると、西村さんはさも当然のように「ええ、そうよ」と答えた。

「ここは私が祖母からもらった建物なの。一階で美容院をやっている、私は上の階に住んでいるわ」

「シツクな感じがしていいところですね」

夜になったら少し怖いけど、と心の中で続ける。それにしても、よくこんな不気味な いや、明治時代に建てられた屋敷みたいなどころに来る勇氣があるなあ、その子供。

「中を拝見しても？」

サクラは西村さんを見て言った。

「ええ、もちろん。……と言つても、今日は定休日ですから誰もいませんけどね」

「構わない。むしろ、誰もいないほうが好都合だ。ミーナ、監視カメラを設置できたか？」

ええ？ ちよつと早過ぎでしょ。まだ一台しか取り付けてないんですけど。

すると、サクラは不機嫌そうに顔を顰めて「早くしろ」と言った。こういうエラーソールなところがなかったら、サクラは普通に可愛い子供なんだけどね。

「推理小説の被害者ってさ、よく『殺さないでくれ!』って叫ぶけど、どうせ殺されるのにそれを言う必要はあるのか?」

ヒバリは兄のすばるに尋ねる。

「ありません」

すばるはきつぱりと言い切った。

「けれど、言わずにはいられないというのが本当のところでしょうね。もしかしたら何とかなるかもしれない、彼らはその可能性を信じていたのだと思います」

「すばる兄さん、俺たちは……」

「どうかしたしたのですか、ヒバリ?」

「……」

ふいに脳裏にかすめた、断片的な記憶。断ち切れぬ連鎖、息苦しい世界の雪、そして古城。どれも覚えのない記憶だ。幼い時に見聞きしたのだろうか? すばる兄さんなら知っているかもしれない。だが、それらは雲を掴むようにヒバリの手からすり抜けて行く。すばるに問おうとした時はすでに、記憶は曖昧になっていた。

ヒバリは首を横に振った。

「いいや、やっぱ何でもない」

私は今、非常に憂鬱な気分だった。

右手に握りしめている携帯を、五分に一度　　いや、一分に一度は構っているだろう。

私は探偵事務所の中でひたすらメールの返信を待っていた。不安でしかたない。どうなるか分かっていたのだけれど……予想外の言葉が返ってきたものだから、覚悟していた事態よりも悪化してしまったのだ。

『サクラは普通に可愛い子供なだけだね』。

その一言を　　よりによって、その部分だけを　　私はうっかり声に出してしまったらしい。それに反応したサクラが私に対しての皮肉を言い、負けじと私も言い返す。数分の口論の拳句、最終的にサクラは不機嫌を通り越し、怒りの余り一言も喋らなくなった。邪魔だと言つかのように追い払われてしまった次第だ。

エラソーだけど、所詮子供だ。子供だから、年上の私より劣っている。　　私は浮かれていたのかもしれない。

メールには、『ごめん』とだけ打った。それ以外に言う言葉が見つからなかったし、あつたとしても言い訳じみているような気がしたから止めた。

再び携帯を開く。新着メールは来ていない。画面の中央ではミキート　ニーが笑ってこちらを向いている。

お気に入りだったはずの待ち受け画面。今はそれを見るのが辛い。

「随分とお悩みの方ですね、ミーナ」

フツと背後から現れたのはすばるだった。

「そう見える？　　すばる兄さん」

彼は頷く。すると、今度はヒバリがやって来た。

「ミーナは分かりやすいんだ、落ち込んでる時なんかは特に」
ヒバリは愉快そうに笑う。

「『失敗は成功のもと』。何がいけなかったのかきちんと反省して、彼に謝るんだな」

「同じ過ちを繰り返さないように気をつけることも大切です」

優しい顔をして厳しいことを言う。……それにしても。いつの間
に、何の用があつてここに来たのか。私が問い質すと、ヒバリは「
お前の上司に駆り出されたんだ。まったく、人使いが荒い奴だな」
と溜息交じりに言った。

「そういう人なのよ、あいつは」

人の身内までコキ使うなんて。呆れるにもほどがある。

その時、携帯が震えた。私は飛びつくように画面に見入る。新着
メールが一件。タイトルなし。本文にはたったの一行。

『言い過ぎた。悪かったな』

発信者は、あなたのご想像にお任せする。プライドという名の服
を着て深紅のカーペットを歩いているような奴が発信者だとはお釈
迦様も思つまい。

彼は自分が暗い場所にいることに気付いた。震えるほど寒いわけではないが、肌寒さは感じる。闇に慣れ、夜目が利いてきた頃、彼はふと思った。

どこだろう、ここは。

辺りを見渡すが、これと言ったものはない。バーコードのようなものが視界のほぼ全てを占めているのは確かだが。

彼は特に何を考えるわけでもなく、それに触れてみた。冷たい。

顔を上げてみる。ほぼ真上を見たと言ってもいい位置に小さな窓があった。光源はそこだけである。と、言っても。

月はどこかに追いやられてしまったように、ここにいること自体が間違っていたと言うかのように、雲の隙間から顔を出すだけだ。

彼は暫くの間それを眺めていたのだが、直に飽きてしまった。再び辺りを見て、彼は溜息をついた。出口と思わしきもの 扉

は封鎖されている。どうやらここから出ることはできないらしい。最悪なことに、彼は自分がなぜこんな状況に置かれているのか分からなかった。

誰もいない。尋ねようがない。早々に考えることを放棄しようとしたその時、近くで物音がした。

「誰？」

その一点だけが他の部分より濃く見える。それは子供の人影だった。

「気分はどう？」

十歳前後の女の子だ。彼女は料理が乗ったプレートを置き、一品ずつ檻の向こう側へ送る。

「人がいることにほっとしたところだよ。」

君が看守なのか

い？」

すると、少女はくすりと笑った。

「まさか。ここは牢屋ではあるけれど、罪人を閉じ込めておくところではないわ」

「でも、現にぼくはここに閉じ込められている」

彼は肩を竦めて言った。すると、少女は落胆したような顔をした。

「……やっぱり前後の記憶だけが抜け落ちることになってしまうのね」

彼は違和感を覚えた。『やっぱり』？ こういうことは何度も起こっているのか？

少女は一旦深く深呼吸をした後、話を続けた。投げやりな言い方だった。

「あなたがあなたでいられる時間はとても短い。どれだけ私があるのかを話しても、あなたは全て忘れてしまう。それが運命なのかと思ったことはあるけれど、そんなの絶対に認めない」

彼女は微笑んだ。悲しそうな笑顔だった。ぼくはこの光景をどこかで見たような気がした。一度どころか、もっと何回も見ていたはずだ。けれど、どうしても思い出せなかった。そんなことはなかったのかもしれない。

どうにも記憶があやふやだった。自分が誰なのかは分かるけど、どうしてこんなところにいるのか分からない。彼女の言っていることも分からない。

「終わらないことなんてないよ。終わりがあるから始まりはあるの」

彼女は唐突に言った。

「明日、ここから出してあげる。……そう言えば、大丈夫だった
」？」

「？」

「……ううん、何でもない」

彼女は「またね」と言った後、ぼくの名を言った。

file 1

名前：霧島美衣奈きりしま みいな

性格：几帳面、世話焼き、面白いこと好き。

備考：自称『探偵の助手』。ミーナと呼ばれている。

名前：桜木さくらぎ

性格：マイペース、冷静、エラソーな奴、手際がいい。

備考：ブチ切れるのが早い。ミーナにサクラと呼ばれるのが嫌。

名前：霧島すばるきりしま

性格：冷静沈着、抜け目ない。

備考：確実な情報を掴む『捜査員』。

常に無表情だが、何も考えていないわけではない。

名前：霧島ヒバリきりしま

性格：飄々としている、気まぐれ。

備考：気分で情報の質が変わる『捜査員』。

常にマイペースなところはサクラに引けを取らない。

ここまでが探偵事務所の人々です

～依頼者～

名前：西村春子にしむら はるこ

性格：控えめ

備考：初対面の人は必ず彼女を『サダコ』だと思っらしい。

～その他の人物～

名前：???

性格：掴みどころがない、大人びている。

備考：白髪のショートカットで翡翠の眼を持つ少女。

近隣の人々は『歳を取らない化け物』と噂している。

名前：??? (ぼく)

性格：素直、純粹。

備考：ブロンド、青色の眼をした少年。

サクラと喧嘩し探偵事務所に戻らされたミーナは何とか彼と仲直りし、現場復帰することになった。ミーナの二人の兄はそれを知らせにやって来たのだと言う。

「それで、あれからどうなったの？」

監視カメラを取り付けたところまでは知っているが、ミーナはそれ以上のことを知らない。すると、サクラは無言で黒い革の鞆からクリアファイルを取りだし、ミーナに渡した。中にはクリップで止められた数枚の紙があった。一枚は、監視カメラの映像をプリントアウトしたものである。そこには十歳前後だろうか、少女の姿が映っていた。栗色のショートヘアにオーバーオールというラフな格好だ。

西村の美容院が元々人通りが少ないところに建っているせいか、付近の道を通る人は少なかった。いたとしても、仕事帰りのサラリーマンばかりである。子供が来る気配はまったくなく。今日はもう止めよう、とサクラが言おうとしたその時。

『あつ……………』

西村は思わず声を上げた。

『見覚えがあるのですね？』

サクラが確認を取ると、西村は強く頷いた。『この子です、間違いないありません』

映像の中の少女は、美容院など存在していないと言うかのように目の前を通り過ぎて行く。いや、もしかしたらサクラたちが来ていることに勘づいているのかもしれない。

「ねえ、この資料は誰が揃えたの？ まさか、ヒバリじゃないよね……………」

「何だよ、俺が作っちゃ駄目なのかよ」

ヒバリは特に落胆するわけでもなく、愉快そうに言った。

ヒバリはサクラに引けず劣らずマイペースだった。気が向かない時の彼が作成する資料は、こちらが呆れるほどいい加減なものに仕上がる。

すると、サクラは「まさか」と言うように肩を竦めた。「その資料はすばるが作ったものだ」

それを聞き、ミーナは幾分か安心した。すばるはいい加減なことなどしない。完璧と言っても過言ではないはずだが、それでもやはり欠落した部分はあった。彼は真面目過ぎるのだ。反面、ヒバリはのらりくらりと生き、面倒事を回避している。二人を足して二で割ったらちょうどいい感じになるのでは、とミーナはいつも思っていた。

ミーナは何となく、というようにページを捲る。するとそこには、にわかには信じられないことが書いてあった。

「『歳を取らない少女』……?」

そんな馬鹿な。

ミーナは呆気に取られた。歳を取らないなんてことはありえない。生物である限り、死の影は付きまとう。

サクラも同じことを考えていたようで、一蹴するかのように冷笑した。

「あくまでそれはただの噂だ、信じるなよ。噂は噂でしかない」

「確かに。本当に歳を取らないんだったら、この子は一生赤ん坊

のままだ」

ヒバリは冗談なのか本気で言っているのかよく分からない調子で言う。その間にも、すばるは淡々と情報集めをしていた。

「ヒバリもすばる兄さんを見習ったら？」

ミーナが呆れて指摘した。

「すばる兄さんはすばる兄さん、俺は俺。それより、どうして俺に対しては呼び捨てなんだ？」

「お前がいい加減な仕事をするからだろ」

ミーナが言う前に、デスクワークをしていたサクラが冷たく言い放った。

「はいはい、分かりました。やりますよ」

ヒバリは肩を竦め、『噂』を調べに行った。

。

a t t h a t t i m e , t h e n . (前書き)

この回にはサクラたちの出番が一切ありません。作者は脇役好きなので。……すみません、これから気をつけます(´・`・´)

a t t h a t t i m e , t h e n .

日差しを眩しさに目が覚めた。昨夜まで冷たかったコンクリートの床がやや熱を帯びている。この牢獄に、当然時計というものは存在しなかった。ぼくはただひたすら彼女が来てくれるのを待っていた。名どころか顔すら知らない子だったが、不思議と彼女を信用することはできる。彼女の子供らしくない言動がぼくにそう思わせるのかもしれない。

「驚いた。意外に早起きのね」

そう言っただけで肩を竦める彼女はさほど驚いていない。昨日とは一転変わって、白いワンピースを着ていた。なぜだか息苦しいこの牢獄の中で明るい色を見るのは久しぶりで、何より新鮮だった。

「一つ訊きたいんだけど」ぼくは錠前を外そうとしている少女に尋ねた。

「君は一体何者だ？」

少女はくすりと笑う。「冴えないことを訊くのね」

冴えないこと、確かにそうかもしれない。あんまりな愚問を投げつけたことに恥ずかしくなり、ぼくは俯いた。

「今はまだ分からないかもしれないけれど」

彼女は懺悔をするかのように言った。

「外に出れば、いずれ思い出せるわ」

それから彼女は色々なことを教えてくれた。彼女の名前、僕自身のこと、この場所のこと、そして。

「魔女？」

信じるべきなのか、疑うべきなのか。その気持ちが声に出てしまったのだらう、彼女は冷ややかな視線をぼくに寄せた。「やっぱり、信じないのね」

綺麗な青い瞳。彼女が振り返った瞬間、それはよりいっそう深ま

ったように見えた。多分、光の加減だろう。

彼女はどこか神秘的な雰囲気醸し出していた。十歳前後の女の子だなんて、とても思えなかった。

すると、彼女は呆然としているぼくを黙って見ていることに耐えられなくなったのか、楽しそうに笑い始める。彼女は自分の歳を告げた。「とてもそうには見えないでしょう?」

だから、私は魔女と呼ばれるの。

彼女の表情に影が覆った。ただし、それは一瞬のこと。次に見た時には掴みどころのない飄々とした表情に戻っていた。

「これでも私はまだマシで、何より良い魔女なのよ。人に危害を加えないもの」

歌うように言う。だがその声は、悲しそうだった。彼女はそれに気付いていない。

彼女はまるで世界の終わりを目にしたかのように。

「この世界には、私以外にもう一人の魔女がいる。彼女は醜悪で、冷酷」

記憶が浮上する。

『***!!』

ぼくは声の出る限り叫んでいた、目の前にいる人物に向かって。その様子からするに、殺したいほど憎んでいたのだろう。

足元には人が横たわっている。とても愛おしく、かけがえのないもの。それなのに、それが誰なのか分からない。もどかしさを感じた。分からないものほど、もどかしいものはない。

そこで映像は途切れた。

「思い出してきた?」

ぼくは頷く。だが、記憶はあまりはつきりしていない。靄がかかったように不透明だ。

「具合はどうだ？」

背の高い男は椅子をこちらに引き寄せて座った。

「良いと言ひ難いね」

「悪くはないんだな？」

雪が降っている。彼らは留まることを知らない。

彼らはまるで旅人だ。世界中を巡ることができる。

僕は彼らのようになりたかった。異郷の地に舞い降り、そして消えていく。儚い命を惜しむ間もなく消える彼らに僕は、強烈に憧れた。

魔女。僕らはいつも彼女に囚われていた。

『運命は変えられぬ。お主がどれほど足掻こうと、連鎖は断ち切れぬのだ』

あの女の声が頭から離れない。甲高く、それでいて傲慢な声。きつとどこかにいる。この世界のどこかに。

「どうした？」

心配そうに尋ねてくる声に、僕ははっとした。

「何でもないよ」

『魔女』。あなたは今どこにいる？

「ボクのものになってよ」

自らを『ボク』と呼ぶ少女。彼女の手にはナイフが握られていた。僕はもう何も驚きはしなかった。安易に希望を信じるには、何もかも遅過ぎた。

彼女は妖艶な笑みを浮かべる。

「君はいつまでもボクの所有物であるべきなんだ」

鋭く光る刀身。

彼女の目には何が映っているのだろうか。僕にはもう分かっていた。瞳の奥で暗く輝いているもの、それは狂気だ。

「君が『魔女』だったのか」

「そうだよ」

「君がそうまでして望むものは何だ」

彼女はクククツと笑う。　僕が最も嫌いだった、あの笑い方は。

「望むものなんて、ないよ。ボクはボクでありさえすればいいんだ。さよならは言わない、だから安心して。今から君はボクの手によって死ぬけれど、永遠の死にはならない。いや、させない。……ボクはね、人が希望を失っていくのを見るのが大好きなんだ。だけど絶望まではさせない。諦めさせるなんて論外だ。ボクは人がもがき苦しむところが見たいんだよ。　君が世界に絶望しないように、ボクがちゃんと記憶を消してあげる」

初めて彼女を可哀相な人だと思ったのは、いつだったのか。あまりにも記憶が薄すぎて、僕は思い出せなかった。

視界が赤く染まる。それはやがて黒ずんでいった。彼女の高笑いが遠くの方で聞こえる。この世界はいつ終わるのだろうか。

インターホンが鳴る。

西村はびくりと肩を上下させた。落ちついて、とヒバリが宿める。西村はそれに従い、深呼吸した。幾分か気持ちが落ち着く。彼女は思い切ってインターホンに出た。

「はい、西村ですが」

声は少女でなかった。それでも西村は後ろを振り返り、監視カメラの映像を見る。サクラは頷ぎました。頷くことによつて、来訪者が例の子供でないことを知らせる。西村は安堵のため息を零し、やや明るくなった声で「美容院は休みです」と言った。

何だ、ただの客か。

拍子抜けしたサクラはぐるりとモニターに背を向けた。その時サクラの視界に入ったのは、彼女の驚愕の表情だった。

「どうした？」

西村の呼吸のリズムは乱れている。運動不足の人が全力で百メートルを走った時のようだ。彼女は途切れ途切れに言った。

「魔女の手下が……！」

「手下？」

ドラ エとかに出てくるモンスターみたいな奴？

ミーナは目を凝らしてモニターを見る。だが、そこに映っていたのは十五、六の男の子だ。金髪に青い瞳、端麗な容姿。

「ハロー、エブリバディ」

少年ははにかむように笑った。

「アー ユー ミズ ニシムラ？」

ミーナは西村を見やる。彼女は恐怖に震えていた。

『あの子』が初めて西村のところに来て来たのは雪解けの季節だった。

「あなたはいつも、私のことを『化け物』と呼んでいるわよね」
彼女が着ていたのはいつも通り、オーバーオール……ではなく、
真っ黒なワンピースだった。珍しく帽子を目深に被り、ヒールのあ
る靴を履いている。どちらも黒一色だった。

『歳を取らない化け物』。

西村は何度となく客からその噂を聞いていた。栗色の髪、青い目、
流暢な日本語を話す異国の子供。大人顔負けの物言いに、子供ら
しくない表情。彼女の親らしき人を見た者はまだ誰もいないと言っ
得体の知れない何かがあった。それらが住民に恐怖を植え付けて行
ったのではないか。

「だって、あなたは『魔女』じゃないッ……！」

西村も例外ではなかった。

この国には、警察とは別に治安を守るためのものがある。政府に
よって作られた組織、『LEC』だ。LECは遠い昔から存在して
いる組織で、知らぬ者などいない。西村も小学生の時に習った。

「Hello, Ms. Nishimura. Could you
enjoy for only the time requi
red left? (こんにちは、西村さん。残された時間を楽
しむことはできたかい?)」

少年は流暢な英語で喋った。先程のように親切な言い方ではなか
ったので、ミーナは彼が何を言っているのか分からなかったが、サ
クラたちは険しい表情でモニターを凝視していた。それは西村も同

じで。

『執行人』。

西村は思考が停止し始めた脳をフル回転させ、そこまで考えるに至った。

『執行人』がやって来たのだ。

「ねえ、『執行人』って何？」

ミーナは振り返って尋ねた。すると、サクラは信じられないと言ったようにミーナを見る。

「知らないのか？」

「うん」

「小学校で習っただろう」

「小学生だった時のことなんて、覚えていないよ」

サクラは深い溜息をついた。先が思いやられる。

「LECに与えられた役割はいくつかある。『執行人』はその一つだ」

一つは、治安を管理するための『魔女』。正義を貫き、それでいて冷静な判断のできる人物が国民の中から抜粋される。年齢、容姿、学歴を問わない。だが、その名前の通り女性しか『魔女』になることはできないのだ。

「反対に、『執行人』は男しか選ばれない。理由は分からないがな」

執行人は魔女が選んだ『罪』を罰する権利を持っている。

「『魔女』が正義の象徴だとするのなら、『執行人』は悪の象徴だ」

その執行人が、壁越しにいる。ミーナは思わず身震いをした。

「帰るぞ」

サクラはすばるたちに機材を片づけるよう命令した。

「彼女が恐れていた子供が『魔女』だと分かった以上、僕たちの出る幕はない」

LECの活動を邪魔することは何人たりとも許されないのだ。

h e s t r e t c h e d o u t h i s a r m a s i f h e w

B L要素が混じり始めたような、そつでないような……。

h e s t r e t c h e d o u t h i s a r m a s i f h e w

「俺はまだここにいるよ」

そう言ったのはヒバリだった。彼は玄関口で少年が出てくるのを待っていると告げる。早く帰って小説を読みたいサクラは「好きにしろ」と一言残し、すぐに去って行った。ミーナは慌てて彼の後を追いかけていく。

「何か気になることでも？」

すばるは帰り際、弟に尋ねた。ヒバリの気まぐれなところは相変わらずだが、それとは違うような気がした。さっさと帰ることはあつても、誰か人を待っていたことなど一度たりともなかったからだ。

「誰か一人ここにいないと西村サンを助けられないじゃん？」

『執行人』は人を殺さない。罪に見合う『罰』を与えるだけだ。

「……そうでしたね」

「じゃあ、後は俺に任せとけ。奴が出て行った後で救急車を呼ぶからよ」

「分かりました。後始末をお願いします、ヒバリ」
リョーカイン
「了解」

鮮血が辺り一面に散乱している。やや離れたところに人が倒れていた。西村春子だ。少年はぼんやりとそれを見ていた。暫くしてか

ら、彼は何か用事を思い出したかののようにポケットから布を取りだした。処刑に使った獲物に付着した血液を拭き取る。それから少年は布を床に捨てた。

『外に出れば、思い出せるわ』

あの子は今どうしているのだろうか。とりあえず言われたことに従ってみたが、人を傷つけることをするのは気持ちの良いことではなかった。

僕は狂っていない。狂っているのは、この世界の方だ。

記憶が蘇る。世界はまだ、終わっていない。

僕は外に出た。周りは静まり返っていた。この場所だけ時が止まってしまったかのようだ。躊躇いなく人を傷つけてしまった僕に科せられた罰なのかもしれなかった。

「綺麗な空だな」

頭上から声が降ってきた。僕は顔を上げた。空は見事に曇

っている。この空を綺麗だと思う人がいることに驚きを覚えた。

「そう思わないか？」

彼は自信満々に言う。他の誰でもない、僕に向かって。その時に、僕はまた記憶の一部を取り戻したのだった。

「綺麗な空だな。そう思わないか？」

子供に『^{ガキ}執行人』をやらせる『魔女』がいたなんてな。驚きだ。

「曇ってるよ」

そいつは生意気にも、ずばりその通りなことを言う。せっかく人

がフレンドリーに歩み寄ってやるつってのに、何だよその態度は。
何か文句でもあんのか？

「やっと思つた!!」

虚ろな目に光が宿ったかと思うと、意味不明なことを言いながら
そいつは嬉しそうに抱きついた。誰に？俺にだ。そして奴は続け
ざまに信じられないことを言った、無邪気な笑顔を浮かべて。

「ずっと君を探していたんだ。会いたかったよっ、『メグリヤ』

」!

my name is Clift .

「それで？ 僕にどうしろと言っんだ」

サクラは冷めた目を向けた。……まあ、そういう反応になるだろうな。

「だから、こいつをどうにかしてくれ」

ヒバリの隣には、物珍しげに事務所内を見渡す少年の姿があった。ヒバリが一瞥くると、少年と目が合った。彼はヒバリを見ると、大きなアーモンド型の目を細めて無邪気に笑う。サクラは溜息をついた。

「どうにもできない。拾って来たのはお前だろ、お前が何とかしろ」

「変な言い草をつけるなよ。拾ってきたんじゃない、勝手について来たんだ」

まあまあ、とすばるが二人を宥める。「来てしまったものは仕方ないですよ。彼の身元を調べてご両親にお返しするのが一番かと」

「それもそうだな。 ミーナ、できるか？」

「もちろん！」

ミーナは胸を張って答えると、すぐさま作業に取り掛かった。すばるより正確さは欠けるが、ヒバリのように面倒がらないところが彼女の良いところだとサクラは内心思っている。

「ねえ、君」

ミーナは振り返って少年に訊く。「名前は何て言うの？」

少年は大きなアーモンド型の目をぱちぱちさせ、不思議そうに首を傾げる。彼は日本語に精通していないのだ。ミーナが言ったことをすばるが英語に訳すと、彼は「なるほど！」と納得した表情を浮かべた。

「クリス」

少年はぼつりと呟く。

それは、遠い昔の記憶に存在する名前だった。僕は自分の名前を知らない。かつての僕は『クリスチアナ』であり、『斉木』でもあったということを知っている。

僕には二つ前世があった。先程挙げた二つの名は、どちらも僕の前世だった人の名前だ。けれど、僕が憶えているのはそこまでだった。彼らがどのように生きていたかまでは分からない。

膨大な量の記憶は脳に障害を与えられ続けている。それを防ぐためなのかどうかは知らないが、僕が憶えている『彼ら』に関する記憶は断片的なものでしかなく、しかも曖昧だ。簡単に言えば、プロフィールを見ているようなものだ。

外の世界。僕は何もかも失った。

白い雪。常識が通用しない狂った場所で、それでも僕は生きていた。

ずっと思い出せなかった。何も思い出せないまま、僕らは同じことを繰り返していた。

点と点と点の世界。棒のように真っ直ぐではなく繋がっていないからこそ何度も何度も発生する現象、『生まれ変わり』。

「***? ****?」

ミーナと呼ばれている人が身ぶり手ぶりで何か尋ねてきた。その動きから察するに、「何て言ったの?」とでも言ったのだろう。

僕は咄嗟に思いついた名前を口にした。

「僕、クリフトって言うんだ」

結局クリフトの両親は見つからず、どこに住んでいたかも分からずじまいになってしまった。ミーナの苦労は水の泡になってしまい、プライドの高い王子様は珍しくもにつこりと、絶対零度の笑みを浮かべて一言。「僕はこのことについて一切関与しないからな」怒りの度が計りきれなくなってしまった。

「どうするんだよ……」

勝手について来てしまったとは言え、帰るべき家がなく親すらいないガキを再び外に放り出すなんて俺にはできない。そんなことができる奴は人間的に終わっていると思う。

大きく溜息をつく俺に、ミーナは呆れたように「ヒバリは何も考えていないんだから」と言った。カチンとくる言葉だが、今に關して言えばごもつともな意見だ。

悩み事ができそうになったら悩む前に即・逃げるとするのがモットーの俺がこんなにも悩んでいるというのに、当の本人はまったく気にしていないようである。いや、言葉が通じていないだけか？

「あの、水を差すようなことを言ってもいいですか？」

すばる兄さんがやや困ったように、全員を見渡して言った。

「どうぞ」

頭が痛くなりそうな展開に、サクラは投げやりに許可した。席を外したい、というのが本音だろうが。

案の定、すばる兄さんとはんでもないこと 世間の常識から見れば、至極まともなこと を口にする。

「この国には、身寄りのない子供を保護したら保護をした人間が養う決まりがあります」

……今、何て言イマシタカ？

社会科の授業で習ったことなどすっかり忘れてしまったというかのように俺は訊き返す。すばる兄さんは面倒くさがることなくもう

一度、同じことを言った。

そういえば学校で習ったよなあ、という感じでしか思い出せない法律。フザけた法を作りやがって。この法律を作った政府の人間、今すぐ叩きのめしてやる。

絶望的な気分には追い打ちをかけるかのようにミーナは言った。「法を破ったら、ヒバリは犯罪者になっちゃうね」

俺にどうしろと？ 五年間このガキと暮せって言うのか？

「そうするしかないでしょう」

すばる兄さんは俺の言葉に頷いた。兄貴を尊敬してないわけでもないが、無神経過ぎるところはどうかと思うな。人間、誰だって落ち込むことはあるんだぜ。

「ハイ、決定〜！ それじゃあ私たちはもう帰るから！」

何気に非情だな、こいつ。

「お先に失礼します」

続いて出て行く兄。

おい、お前らただ面倒事を俺に押しつけてるだけだろ！ 保護者なら別に誰がなったって構わないだろうが！！！！

「お前が拾ったんだから、お前が面倒見るべきだろう」

俺まだ21なんですけど！！ 人生これから、って時ですよ？！
そんなの御免だ！！

すると、サクラは冷笑して決定的な一言を告げた。

「たとえ僕がこいつの面倒を見ることになってもね、僕には保護者の権利がないんだよ。未成年だからね」

file 2 (前書き)

探偵事務所のメンバーにクリフトが加わりました。

現時点でのキャラ紹介です。file 1で紹介したキャラですが、補足・訂正があるのでもう一度掲載させていただきます。

file 2

〓 桜木探偵事務所の人々

名前：霧島美衣奈きりしま みいな

年齢：20

性格：おつちよこちよい、場合によっては非情になる面もある。

備考：自称『探偵の助手』。助手というより雑用係の扱いを受けている。

ヒバリの双子の妹。

名前：桜木さくらぎ

年齢：17

性格：冷静、マイペース

備考：探偵。プライドが高く、無愛想。

名前：霧島すばるきりしま

年齢：21

性格：冷静沈着、几帳面

備考：霧島家の長男。正しいことしか言わないため、時に空気が読めない。

名前：霧島ヒバリきりしま

年齢：20

性格：気まぐれ、面倒ごとは避けたいタイプ

備考：ミーナの双子の兄。本人は否定しそうだが、世話好きな面もある。

名前：クリフト

年齢：15(?)

性格：無邪気で素直。従順。

備考：『魔女』の配下にある『執行人』という立場に身を置いているが……？

少女は憶えていた。何を？ 自分が生まれる前のことをだ。

少女はかつて一国を治めていた女帝だった。彼女 フローラ

には常に忠実な兵士がいる。決して彼女を裏切らない兵士…

…だった。

何かがおかしい。

フローラは困惑していた。

絶対に裏切らないはずの兵士は自分を見捨てた。生き残るはずだった彼は醜く生きるより自害を選んだ。外の世界を知った青年は己が殺されることに何の疑問も抱かなかった。いや、分かっている。自分の死を選んだのかもしれない。そして何より、いつもならすでに帰って来ているのに、西村春子の元へと送り出した少年は一向に帰って来る様子がない。

「世界の秩序が失われてきておるのか……」

フローラは少女らしくない口調で呟いた。

もう秋の半ばだというのに、朝の太陽は遠慮というものを知らない。何なんだ、この殺人的な日差しは。

直射日光に嫌々ながらも起こされたヒバリは悪態をついた。彼は朝に弱い人間ではないのだが、それでも睡眠の邪魔をされるのは許せないらしい。彼は日の当たらない場所に移動し、二度寝しようとする。だが。

「まじかよ……」

ヒバリは舌打ちする。目の前にはすやすやと眠る少年がいた。

ヒバリは二度寝するのを諦めた。いくら歳が離れているとはいえ、野郎ヤロウと寝る気はさらさら無い。彼は知らず知らずのうちに深い溜息をついていた。俺より年上の美女だったら大歓迎なんだけどな、と。

朝からカップラーメンはマズイよな。

いくら同居人の性別が残念でも、体調管理はしてやらないといけない。それが最低限の 無理矢理押し付けられた身としての 責任だと思う。

これまで自堕落な生活を送ってきたヒバリも一応料理は作れるのだが、自分一人のために手間をかけて作ることはしない。よって、冷蔵庫の中に食材は存在しなかった。

「何か買ってくるか……」

面倒くせえ、と文句を言いながらもヒバリは家を出た。

家に帰ると、そこには不貞腐れた少年がいた。クリフトだ。

「……どうしたんだ？」

ヒバリは条件反射で思わず訊いてしまった。クリフトは不服そうに「どうして僕も連れて行ってくれなかったの？」と言った。

「どうしてって、お前が気持ち良さそうに寝てたからだろ。わざわざ起こすの悪いし」

実のところは違うのだが。本当は、起こすのが面倒臭くて放っておいたのだ。するとクリフトは非難めいた目を向けながら「次から

はちゃんと起こしてよね」と念を押す。ヒバリは曖昧な返事をして朝食の準備に取り掛かった。と言っても、ご飯やみそ汁を作るとさらに時間がかかる。すぐ食べれるものにしなれば。

「何か食べたいものあるか？ あんまり凝ったものは作れないけどな」

クリフトは首を横に振った。「何でもいいよ。『メグリヤ』が作ってくれるなら」

ずっと疑問に思っていたのだが。

「なあ、『メグリヤ』って誰？」

度々会話に出てくる単語。恐らく日本人名の『巡矢』だと思っただが。

クリフトは一瞬驚いたようにヒバリを見て、どこか哀しげに俯いた。

「そつか。憶えていないんだね……」

「？ ああ。 悪いな」

何故だか謝らなければならぬような気がした。そんなヒバリの思いを余所に、クリフトは台所へとやってくる。その頃にはすでに人懐っこい笑顔を浮かべていた。

「あつ、これ知ってる！ ミソでしょう？ 日本で有名な」

「有名かどうかは不明だが、まあ日本人には欠かせないものだな」その時、電話が鳴った。ヒバリは近くに置いてあった子機を取る。

「もしもし？」

『あ、ヒバリですね』

「その声はすばる兄さん？ どうしたんだ？」

『さつそく仕事が来ましたよ。そつちに連絡入ってます？』

「いいや、初耳だ」

『それじゃあ、午前十時に桜木事務所に来てください』

「分かった。じゃあな」

電話を切る。やはりと言うか何と言うか、クリフトは興味津々「どうしたの？」と訊いてきた。

「仕事だ。十時にはここを出る」

「ヒバリの仕事って、サクラの手伝いをすることだよな！ 探偵の仕事かあ、どんなことするんだらう」

「お前も来るか？」

「えっ、いいの?! 邪魔にならない？」

目をきらきらさせて身を乗り出すクリフト。溜息が出そうになるのを抑えて、ヒバリは頷いた。

「ありがとうっ、ヒバリ!!」

クリフトはぎゅっとヒバリに抱きついた。

「分かった、分かったから離れろ!!」

好奇心旺盛という言葉はこいつ　クリフト　のためにあるに違いないと思ったヒバリだった。

「ふうん、なるほどね」

探偵事務所の扉を開いたミーナは中を一通り眺めた後、呆れるように言った。「いつからここは託児所になったの？」

「知るか!!」

サクラはバンツと机を叩く。来客用のソファには、小学四年生くらいの女の子がいた。長めの髪を二つに縛っている。それだけなら普通の子供だと思うだろう。だが、彼女は違った。ごく普通の子供とは到底思えぬような不機嫌さを醸し出していたのだ。

「依頼者の子供さんですかね。それで、当のお客様はどこにいますか？」

こつこつの子の親なのだから相当扱いづらい客なのだろうなと思いつつ、ミーナはサクラに尋ねる。すると、不服そうな色を込めた子供特有の甲高い声が事務所に響いた。

「オレが依頼者だ！」

発信源は、あの少女である。ミーナは自分の目と耳を疑った。

「オレが依頼者だよ、文句あるか！」

少女　　リンと名乗った　　はふんぞり返るようにソファに座っている。

「そうですか……すみません。では、さっそく相談内容を聞かせていただけますか？」

サクラはリンに向き直った。ミーナが急いで紅茶を運んでくる。

「オレの姉ちゃんを探してほしいんだ」リンは単刀直入に言った。

「お姉さん？」

「ああ」

「失礼ですがお姉さんのお名前、身体的特徴、性格などを教えてください」

サクラがそう言った途端、リンは気まずそうに歯切れを悪くした。

「それが……分からないんだ」

「やっべ、遅れた！」

ヒバリは腕時計を気にしながら探偵事務所の階段を登っていた。約束の時間から三十分は過ぎている。彼の後ろをついてくるクリフトは、泣きそうな顔をしてヒバリに謝った。

「ごめんなさい、僕のせいでバスに乗り遅れちゃって……」

「元々あそこはバスの本数が少ないんだ、仕方ないさ」

探偵事務所を目前にして、ヒバリは急に立ち止まった。中から話声が聞こえる。お馴染みの声に、聞き覚えのない声の一つ。

『オレが依頼者だよ、文句あるか！』

「……お客さん？」

突然の大声に驚いたクリフトは目をぱちくりしてヒバリに尋ねた。

「ああ。そうみたいだな……」

これでは中に入りづらいではないか。

二人は遅刻してきた気まずさから、中に入れずにいた。だが、好奇心から、わずかだが漏れてくる声に　　プライバシーの何とやらはどうなっているんだとヒバリは思わず心の中で突っ込んだ　　耳を傾ける。

『オレの姉ちゃんを探してほしいんだ』

『お姉さん?』

『ああ』

『失礼ですがお姉さんのお名前、身体的特徴、性格などを教えてください』

『それが……分からないんだ』

「『分からない? 自分のお姉さんのことなのに?』

クリフトは不思議そうに首を傾げる。

その時、凄いい剣幕をした中肉中背の女が階段を駆け上がって来るのが見えた。

「あんたたち! ちょっとそこどいて!」

「は、ハイッ!」

間髪入れずに二人は道を開ける。四、五十代くらいのその女はセブンを疑いたくなるような真つ赤なヒールで喧しく音を立てながら探偵事務所の中へと消えた。

「何だったんだ? 今の……」

呆然とするヒバリ。しかし、それはつかの間だった。先程の女と依頼者であるはずの子供が何やら言い争っているのが聞こえた。

「どうする、ヒバリ? 事務所の中に行く?」

クリフトは引き気味に言った。

行くしかないだろう。そうしないと、後からあの探偵に何を言われるか分かったもんじゃない。

「しょうがねえ、巻き込まれてやるか」

calling herself Rin is the girl .

(後書

何故に少女ばかりが登場するのかと今更ながら疑問に思いました。

『女の子』ではなく『女性』でも良いだろう、と。反省。

calling herself Rin is the girl part

依頼者視点となります。更新が遅くなつてすみません(^^)

「いい加減にしなさい！」

もの凄い剣幕で事務所の扉を開け放ったのは、やや小太りの身体を宝石で着飾った中年女性だった。彼女は呆然としているミーナたちを余所に、ずかずかと少女の元へ行く。

「『エリカ』！ あんた、また勝手にこんなところに来て！！」

「『エリカ』……？」

ミーナたちは顔を見合わせる。すると、中年女性はフンつと鼻で笑って「どうせこの子が『リン』とでも名乗ったんだろう？ まったく、姉さんもとんだ子供を押し付けてくれたよ。この子はね、エリカっていうちゃんとした名前があるのさ。それなのに、私が引き取った時から自分のことを『リン』だと思い込んでいる。気違いな のさ」と吐き捨てた。

「気違い？ ハンツ、それを言うならあんたの方が気違いだぜ！」

リン いや、エリカ は反抗的な目を義母に向ける。

「宝石で着飾らないと見られないような姿だなんて ま、あんなの場合、身につけていても見られないけどな！」

「何だつて?! ああ、こんなイカれた子を押し付けられるなんて、私や本当に不幸だよ。何度言っても妄想を止めないし、口調はまるで男みたいで」

「オレは男だ!!」

少女は叫ぶように言った。

「オレは『エリカ』なんて名前じゃねえ。オレは『リン』だつてんだろ！」

その時、一人の少年が恐る恐る事務所にやって来た。クリフトだ。少女は目を見張った。

「お前……」

驚きと怒りのあまり声が出ない。

白に近い金髪、氷のように澄んだ瞳。その表情からは何を考えているのかまったく読めない。間違いない。あいつだ。

エリカの脳裏に、遠い昔の記憶。仲間のフリをして、自分たちを裏切った男。が浮かぶ。

「　　つの野郎！！」

エリカはクリフトに飛びかかると、馬乗りになって彼を殴った。

「！？　おいっ、やめろって！！」

クリフトの後から現れた背の高い青年は、何かと驚いて二人を引き離す。

「大丈夫か？」

青年はクリフトを立たせてやると、一部始終を見ていた者たちに「一体何があつたんだ？」と尋ねる。

「さあ。僕の知ったことじゃない」

サクラはさも興味なさげに肩を竦めた。その時、静寂を破る音がした。

「エリカ！　余所様の子になんてことをするんだ！　謝りなさい！」

その音は、厚化粧の義母がエリカの頬を叩いた音だった。

「だって、あいつは　　！！」

エリカは一瞬クリフトに目をやり、彼の表情に驚きの色がなくなるのを確認すると、舌打ちした。

「憶えてねえのかよ。それとも、忘れてるフリをしているだけか？　卑怯なあんならしいよ。……まあ、どっちでもいい。あんながあんたであることは変わらねえしな。義母ババアに免じて、とりあえず

謝つてやるよ、悪かった」

義母ババアが何やら喚いたが、オレは無視した。「あの人」に比べたら、
義母なんて怖くも何ともない。

「お前に話がある。ちよつと時間をもらってもいいか？」

半ば強制的だったが、それでもオレは確かめたかった。

忘れてるとは言わせねえ。忘れていたとしても必ず思い出させて
やる。オレたちのことを。

calling herself Rin is the girl part

やっ”white snow”と”外の世界”の話繋げることができました。

僕は雪を見ていた。

永遠に降り続けるのではないかと思わせる雪、けれどそれが永遠に続かないということに僕は知っている。

「お前は自分が誰だったか憶えているか？」

陣内は瓦礫の山を崩していきながら僕に訊いた。

「ああ。憶えている」

旅人のような雪に憧れた。僕もかつては旅をしていたからだ。

雪が嫌いだった。雪を見るたび、息苦しくて仕方なかった。

どうして？ 決まっている。雪の色は、『光の樂園』を思い出させるからだ。

「陣内」

「何だ？ 斉木」

「メグリヤを見つけたかもしれない」

陣内は瓦礫の駆除を止めた。「本当か？」

『メグリヤ』。彼女の本名は『巡矢 恵』。前世の僕が愛していた女性。

僕は彼の念押しに強く頷けなかった。

「分からない。もしかしたら、違いかもしれない」

「そうだな。あまり期待はしない方がいいかもしれない。……それにしても、なぜ俺とお前だけが前世の記憶を持っているんだ？」

「分からない。今までこんなことはなかった。僕らは運命に逆らえなかった。もしかしたら、世界の秩序が失われてきているのかもしれない」

「秩序が失われるとどうなるんだ？」

僕はまるで根拠のないことを言った。

「世界が終わるのさ」

「何も憶えていないのはどっちだ？」

僕はリン　本人の意思を尊重して、リンということにしておこう　と共に廃病院の中にいた。ここなら誰かに話を聞かれる恐れがなくなる。

山の上の病院。『斉木　和也』。

リンは訝しげな表情で僕を見た。「それはどうということだ？」

あつ、おい待ててっ！」

病院内を知り尽くしているかのようにクリフトは歩いて行った。慌ててリンが追いかける。

見慣れた風景、しかし『昔』と違って院内は瓦礫や硝子ガラスの山になっている。白衣の者たちの姿も見当たらない。クリフトはある病室の前で立ち止まった。

「メグリヤじゃない」

「え？」

陣内は驚いて振り返った。そこには斉木がいた。彼は何とも言え

ないような表情をしていた。そして、もう一度同じことを告げる。

「メグリヤじゃなかったよ、彼女は」

「　　そうか」

「アーティは……あいつはフローラだ」

フローラ。断ち切れぬ連鎖に巻き込まれた同胞。

「それで？」

「？」

「それで、お前はとうするんだ。フローラを倒すのか？」

齊木は首を横に振った。陣内には理解できなかった。

あい

つはオレたちを皆殺しにした女だぞ。

「もういいんだ」

齊木はゆっくりと息をはきだした。

辛くはない。絶えず感

じていた息苦しさも、もはやなかった。

「いいんだよ、陣内。今なら彼女の気持ちが少しだけ分かる気がするんだ」

気付くと、親しかった者たちはどこにもいない。どこを探しても見つからず、たとえ見つかったとしても記憶を所有していない。彼女は常に孤独だった。

「終わらせるんだ、こんな馬鹿げた芝居は。だから　　」
今までは有り得なかった終わり方をしようじゃないか。

「まさかお前……」

陣内が固唾を飲んだ時、齊木はふと思い出したかのように話を変えた。

「ずっと思っていたんだけど、どうしても君に訊けなかったことがある。君は、どうしてずっと僕の傍にいてくれたんだい？　陣内

」

「『陣内』。それが、もう一人の君だった」

クリスは鈴リンに話しかけた。彼は困惑する鈴を見て、話すのを止めようかと思った。

「続ける……！」

鈴は憎しみがこもった目をクリスに向けたまま、それでいてどこか辛そうに話の延長を求めた。クリスは鈴を冷やかな目で一瞥した後、淡々とした口調で話に戻った。

「僕は誰がフローラなのかを悟った。いつもなら気付くことなく彼女に殺されていたはずだ。そうなることが『普通』であり、彼女以外の転生者が記憶を保持していたことは『異常』だった」

「……じゃあ、あんたはフローラに殺されなかったんだな？」

「見方によればそうなるのかもしれない。確かに僕は『全てを知った後で彼女に殺された』」

「何だよそれ……！？ あんた、馬鹿じゃないのか?!」

自分のことのように怒りだす鈴を見て、クリスは僅かに笑った。無邪気さはなかった。

「君はいつも同じことを言う。優しいね」

「誤解するなよ、オレはあんたを許していないからな！」

「許されるとも思っていないよ。陣内が かつての君が

あの後何て言ったか知っているかい？」

「オレは齊木クリス、あんたを殺してやりたほど憎んでいる。だがな、あんたはお人好し過ぎるんだ。オレが殺さなくてもあんたは勝手に

死んでくれる。オレが今ここにいるのは、あんたの死に様を見てやるうと思っっているからだ』

『何だい、それ。君にしては面白味に欠けたブラックジョークじゃないか』

「姉を探しているんだろう？」

僕が言うと、鈴は弾かれたように顔を上げた。

「そうでなきゃ、君がいくつもの探偵事務所を回る理由を説明できない。あの時君が姉であるはずの人間の姿も名前も分からないと言ったのは嘘ではなかった。探し求めている人物は、まだ会ったこともない他人と化していたからね」

「……相変わらず、頭の回転だけは良いんだな」

鈴は呆れたように言う。「考えることは嫌いじゃない」と僕は言い返した。

「僕なら君に協力することができる。だが、それはもちろん君の許可が出た場合だけだね。裏切り者ほくを利用したいのなら、君が先に僕を裏切ることだ」

t h e o u t e r w o r l d (前書き)

登場人物が多過ぎてカオスになってしまった……。

『裏切り者を利用したいのなら、君が先に僕を裏切ることだ』

……つい勢いに任せてあんなことを言ってしまったけれど、あれで良かったのだろうか。あの後、鈴は考え込んでいたが。

「？ どうしたよ、クソガキ。元気ねえなあ」

呆れたように言ったのはヒバリだった。

「元気なんて」

「元々あり余ってんだろ？ ま、たまには落ち込むことも悪くないぜ」

「落ち込んだこともなさそうな奴に言われたくないね」

「おー、反抗期か？ 俺に当たるのは構わんが、サクラは止めておけよ。アイツ、すぐブチ切れるからな」

「ふうん。覚えておく」

彼らと出会って、まだ一カ月も経っていない。だが、この一カ月で随分色々なことを知ることができた。

生まれ変わりの現象は常に『僕の周りで』起きているということ。仲間全員が生まれ変わるのではなく、不特定少数の人が生まれ変わっているということ。そして、転生前の記憶を受け継ぐ確率は二分の一だということだ。

「あ、クリフトくん！ ここにいたのね。君にお客さんだよ」

ミーナはにっこり笑って言った。そして、客と呼ばれた人物を事務所の中に通す。

クリスとさほど変わらない年齢に見える少女。黒のワンピースに身を包んでいる。

「あれってもしかして……」

ヒバリは嫌な予感がした。どうしてミーナが平然としているのが分からない。少女の手にはある物が握られていた。初めてクリフトと会った時に彼が手にしていたものに似ている。

ナイフではない。そんなちやちな物じゃない。それは誰もが目を疑うような、巨大な漆黒の鎌だった。……クリフトは白い鎌だったが。

『魔女』。

彼女が今ここにいる。

「『フローラ』……」

クリフトは硬い表情をしていた。少女はにやりと笑った。

「ようやくわしのことを思い出してくれたようじゃの、『クリス』
いや、今はクリフトじゃったかの」

「『クリス』？ 誰だよ、それ。……一体何が起きているんだ？
ヒバリは訳が分からずミーナに尋ねた。だが、ミーナも首を振るばかりで答えを知らないようだ。

その時、白い閃光が事務所内を埋め尽くした。

「なっ、何だよこれ?! 目が開けられねえっ!」

「何だよ、知らねえのかよ! 魔法に決まってるんだろ!」

鈴は両腕を顔の前でクロスして光を防ぎながら叫んだ。

「魔法? そんなもの、あるんですか?!」

すばるは信じられないというように訊いた。声を荒げる必要はな

かったが、皆が皆、大声で話していたので、すばるもつられて声が大きくなる。

「どうでもいいが、仕事場をめちゃくちゃにするな!!」

カーテンは吹き飛び、応接セットは無残に切り刻まれている。我に返ったサクラが惨状を見て怒鳴った。

フローラは意に介さないとしようようにため息をつく。彼女は何も見ていなかった。いや、そうではない。彼女は彼一人しか見ていなかった。それからフローラは軽く周囲を見渡し、にやりと笑う。

「なるほど、愉快的仲間が揃ったものじゃ。全員揃ったのはこれが初めてじゃの」

「『全員』……？ 何のことです？」

ひばりは訝しげに眉を顰めた。フローラはクククツと笑い声を上げる。

「分からぬか？ 言葉の通りじゃよ」

フローラはすばるのかつての仲間の名を挙げる。「メグリヤ、クリス、レイチエル、玲、鈴。……後に英雄と謳われた、お主の仲間たちのことじゃ。本来ならば、このわしを負かした憎き英雄全員が同じ時代に揃うことはないはずじゃが……どうやら秩序は失われつつあるらしいの」

「オレの姉ちゃんもいるのか?!」

鈴ははっとしたように身を乗り出して言った。

「もちろんここにおる。じゃが、それをわしの口から告げるのは面白くない。姉弟だったのならば、自力で探すことは不可能ではないであろう?」

フローラは彼らを見渡した。明らかに、彼女はそこにいる全員を見下していた。なぜこれほどまでに彼らは弱くなったのかと疑問に抱くほどだった。

「クリス……。どうしてわしを倒そうとせぬのじゃ?」

おかしい。いつもなら、顔を見るなり切りかかってくるはずなのに。

「同じことの繰り返しはもうたくさんだ」

クリスは執行人の証である鎌さえ持つて来ていなかった。

「僕があんたを倒すことに何の意味がある？ あんたが僕に殺されることに何の意味があるんだ。どうして僕らは生まれ変わり続けるのか。今回僕が前世のことを憶えていたのはなぜだ？ ……そう思った時、僕はあることに気付いた」

終わらない世界。

終わらないんじゃない、終わろうとしていないだけなんだ。

「終わろうとしていないのなら、終わらせればいい。同じことを繰り返し返しては終われない。だから僕はあんたを倒さない。それだけだ」

「……そうか。それなら」

フローラは魔法弾を放った。クリスに、ではなかった。クリスは魔法弾が向かう先を見る。

「っ！ メグリヤ！！！」

「……り！ ヒバリ！！」

遠くで誰かが俺のこと呼んでるみたいだな。

「ヒバリっ、しっかりしろって！」

あー、この声は鈴だ、多分。あいつは昔っから何事にも一生懸命だからな。

ん？ 俺、どうしてそんなことが分かるんだよ。……まあいいや、何か眠いし。辺りがすっげえ騒がしいけど、何か大変なこと起きてんだなーってことは分かるけど、俺そういうの関わりたくない性質だから。逃げるが勝ちって言うじゃん。

それにしても眠い。眠いし、頭痛いんですけど。

「どうだ？ すばる」

「駄目です、間に合いません！ 出血が酷くて……！！」

「ヒバリ！ しっかりしなさいよ！ あんたがいなくなったら家族みんな寂しくなるでしょうが……！！」

『いなくなる』？ ……ハハっ、何だそういうことかよ。

俺は死ぬのか。

死ぬのはちょっと……いや、まだ随分早いんじゃない？ こんだけピンピンしてるんだし、多分大丈夫だろ。

……多分な。

「クリス」

フローラは何気なく声をかけた。暇を持て余しているように見える。

「何だ？」

「お主、嫌われたのう」

やれやれと言うように溜息をつくフローラ。心なしか、哀れみを滲ませた口調だった。

「……は？」

一体何のことだ？

だが、それでもクリスは表情を変えなかった。フローラの放った魔法弾がヒバリに命中し、彼は重傷を負ってしまったのだ。

傷が深い。すばるに診てもらってもないことに彼は気付いていた。

「わしには分かっている。その男、お主がかつて愛した女

メグリヤ　じゃろう？」

「それがどうした」

クリスは治癒系ヒーリングの魔法が使えなかった。このままでは、ただ黙って見ていることしかできない。ただ一つの方法を除いて。

「皮肉なものじゃな。長年探し求めていた女は記憶を持ち合わせ
ておらず、女ですらなくなっている。どう考えても彼女メグリヤに嫌われた
としか思えんじやろう。……それでもお主はこの世界で生きてい
こうとするのか？　お主がわしを倒さぬせいで仲間が傷つけられるの
を黙って見ておるのか？」

……僕は。

「君も助けたいんだよ」

『ボクを助けて、齊木』

そう言って、彼女は泣いた。あの言葉は嘘じゃなかったはずだ。

僕はずっと気づいていた。けれど、あまりにも現実味が無くて気付かないフリをしていた。どうしようもないことだと見て見ぬフリをしていた。僕は彼女を解ろうとしていなかった。

「わしを助けるだと？ まったく、意外なことを口にしてくれる。わしは助けなど求めておらぬし、誰かに助けてもらおうとも思っておらぬよ」

「確かにそうかもしれない。でも、君はずっと苦しんでいたんだらう？ 神の命令には逆らえないから」

神。この世界の創世主。

僕らはずっと、戦う相手を間違えていた。

file3 (前書き)

各キャラの前世、能力、愛用の武器などを載せてみました。

世界観の説明も補足しておきます (^ ^)

また、今世名と前世名をいちいち書くはややこしくなってしまうので、徐々に前世名に戻していくと予定しております。紛らわしく
てごめんなさい (- -)

file 3

名前：クリフト

性格：飄々としている

容姿：金髪青眼。童顔。

年齢：15

前世：クリスチアナ・ブランフォード / 齊木和也^{さいき かずや}。

記憶あり。

備考：風属性能力者。

愛用の武器は『執行人の鎌』。

名前：霧島ヒバリ

性格：気まぐれ

容姿：茶髪、瞳はブラウン。

年齢：20

前世：メグリヤ・メグミ。

記憶なし。

備考：無属適応型能力者

クリフトが現れるまではただの一般人だった。

愛用の武器はなく、状況によって使用するものを変える。

名前：エリカ（鈴）

性格：子供っぽい

容姿：黒髪、瞳はグリーン。美少女。

年齢：12

前世：黒澤鈴 / 陣内智利^{じんないともかず}。

記憶あり。

備考：『鈴』と名乗っている。ヒーリング 治癒系能力者。
アサルトライフルを愛用。

名前：サクラ

性格：怒りっぽい

容姿：銀に近い黒髪、黒眼。

年齢：17

前世：黒澤玲
クロサレイ

記憶なし。

備考：水属性能力者。クリフトが現れるまでただの一般人だった。
主に銃を使っているが、日本刀を使うこともある。

名前：霧島すばる

性格：冷静

容姿：金髪青眼。整った顔立ちをしている。

年齢：21

前世：ゼロ・ブランフォード。

記憶なし。

備考：雷属性能力者。

システム・ウェポンを改良した銃を使用するが、愛用して
いるわけではない。

名前：霧島美衣奈
きりしま みいな

性格：しっかり者

容姿：黒髪紅眼。整った顔立ちをしている。

年齢：20

前世：レイチエル・デスペラード。

記憶あり。

備考：炎属性能力者。

シヨットガンを愛用するが、前世の記憶があるためか戦法が格闘のみになりがち。

名前：フローラ

性格：古風

容姿：白髪、瞳はグリーン。美少女。

備考：光の楽園の女帝だった人。全ての謎を知るキーパーソンとなる。様々な魔法を使える。

・『能力者』

能力まほうが使える人たちのこと。能力者になれるかどうかはその人次第。生まれつき、使える魔法の属性が決まっている。

・『属性』

何の能力が使えるのか、ということ。能力者の性質。

・ 『光属性』

神を信仰することでしかなることができない属性。能力まほうが使えない人たちでも神を信仰すればこの属性を持つ能力を使うことができるようになる。ただし、神を信じなくなると能力が使えなくなってしまうという欠点も。一般向けの能力。

・ 『闇属性』

神に嫌われた者や、忌み子でなければなることができない属性。アンデット系の魔物には通用せず、二度とこの属性を手放すことができないという難点があるが、どの属性よりも攻撃力の高い能力を使用することができるという長所もある。

・ 『炎属性』

火の能力が使える。

・ 『水属性』

水の能力が使える。

・ 『雷属性』

雷の能力が使える。

・ 『風属性』

風の能力が使える。

・『多属性』

異なる二つの能力を使うことができる。二つの属性には優性と劣性があり、優性になった属性はどんな種類の能力（回復系以外）でも使うことができるが、劣性になった属性はアシスト技しか使えない。極稀にこの属性を持った能力者が生まれる。非常に珍しい属性。

・『ヒーリング系』

回復系の能力を使うことができる唯一の属性。攻撃技などは一切使うことができない。この属性を持つている能力者は将来、僧侶や神父になるケースが多い。

・『無属性』

能力が使えない。大半の人間が無属性である。

・『無属適応型能力者』

特定の属性を持つことができないため、通常は無属性能力者とほとんど変わらない。ただし、いくつかの条件をクリアすれば、どんな属性の能力でも使うことができる。光属性と同じで後天的に身につけることができる属性であるが、使い勝手が良い分リスクを伴う。

I l e f t t h e r e w i t h a n x i e t y .) c a p a c i t y

” 外の世界 ” の時より、鈴が素っ気ない性格をしているような気が
しました。

気のせいでしょうか (^ ^ ^ ^

知らなかったと言えば嘘になる。

「お前なんかいなくなれ！！　二度と現れるなつ、このバケモノめ！！」

それでも、全てを憶えていないというのは本当だった　。

「クリス」

鈴だった。

「オレはあんたを許しちゃいねえ。でも、仲間がピンチだった時に何もしないほど馬鹿じゃねえ。……あんたにとって、利用されるはどうでもいいことなのかもしれないが、オレは違う。あんたを本当の意味で利用しようと思っている。でも、そういうのって初めに信頼関係が無いと成り立たないだろ？　あんたを裏切るその時まで、不本意ながらもオレはあんたを信じてやるよ」

鈴はそれだけ言うと去ってしまった。

「すばるさん。ちょっと交代してくれ」

彼は輪の中に入って行くと、ヒバリの傍でしゃがみこんだ。大きく深呼吸し、そっとヒバリの手を取る。鈴の手から発せられた淡い光がヒバリを包み込んだ。すると、みるみる怪我が治っていく。

「どうなっているの……？」

ミーナは目を疑った。鈴はさもつまらなさそうに「ただの魔法だ

よ」と答えた。

治療系能力者^{ヒーリング} 回復魔法が使える唯一の能力者のことだ。鈴は治療系能力者だった。

この世界には二種類の人間が存在している。能力^{まほう}を使える『能力者』と、能力を使うことができない『無属性能力者』。これは努力してなれるものではなく、遺伝的なものが関係している。実質、人類の半分以上が無属性能力者であるのだ。

「ふむ。お主らの中に素質のある奴がいるようじゃな。わしが能力を目覚めさせてやるうかの？」

「くだらない。魔法だなんて、現実にはありえない」サクラは一蹴した。

「鈴の魔法を見たじやろうが。それでも魔法なんてないとお主は抜かすか？」

「僕は『探偵』だ。仮に僕が非現実的なものを信じたとして、犯人を定める時に『お前は魔法を使って被害者を殺したんだ』と言ったとしたらどうなると思う？ ミーナ」

突然話題を振られたミーナはつつかえながらも答えた。

「無実の人が裁かれてしまう可能性があるわ」

「その通り。探偵^{ほくら}が非現実的なものを信じないのは仕方のないことなんだ。それを分かって頂きたいね、魔女様^{フローラ}？」

サクラは皮肉るように肩を竦めた。フローラはそれを聞いて、ピクツと片眉を上げた。

「そうか……。お主は意地でも能力者^{ちから}を信じないと申すのだな」

彼女が怒ったのは、言うまでもない。だが、その時偶然にもその場の空気を破る出来事が起きた。

「うるせえなあ……。人の耳元でギャーギャー騒ぐんじゃねえよ……」

一時は瀕死状態にまで陥ったヒバリが不機嫌を露わにして、何事もなかったかのように起き上がったのだ。

「目が覚めたんですね、ヒバリ」

「すばる兄さん？ …… つと、その他大勢か。お前ら、揃いも揃って何してんだ？」

どうやら自分の身に起きたことを憶えていないらしい。ミーナは脱力した。

「元気なのは良いことだわ。だけど惚けるのは止よしてよ」

「ヒバリらしいですね」すばるは苦笑する。

「心配かけさせんなよな！」

「迷惑料を払え」サクラはそう言って、深い溜息をつく。

「……」

ヒバリはクリスが元氣無さげなのに気付いた。

「どうした？」

声をかけると、クリフトははつとしたようにヒバリを見る。呪縛を解かれたような動きだった。だが、彼はすぐに俯よいてしまった。

「僕が油断していたせいで、君に魔法弾が……。ごめん！」

クリスはその言うなり事務所 と言える有様ではないがから出て行った。

「？ いや、意味分かんねえし！ ちょっと待てよ！」

彼を追ってヒバリも外へ出た。だが、姿が見えない。

「どこ行きやがったんだ、あいつ……」

ビルの屋上にて。

「はあ……。どうしたらいいんだろっ」

白に近い金髪、深いブルーの瞳を持つ少年

クリス

は

幾度となく溜息をついた。執行人の証である巨大な鎌を今は持つていないが、上下とも真っ黒の服を着ているため、やけに目立つ。

「どうしたらいいと思う？ チャコ」

チャコは呆れたように言った。「どーでもいいんじゃないの？」

「何だよ、適当だなあ」

クリスは不貞腐れたように、虎縞の『猫』に言う。

「ヒヒツ、そうかもな。ま、クリスの好きなようにすればいいさ。

オレはいつでもお前の味方だからよ」

「……そうだったね。ありがとう、チャコ」

クリスは柔らかく微笑んだ。

s h e l o s t s o m e t h i n g .

神は自らが創った下界を見下ろしていた。その黄金の瞳には何の感情も浮かべられておらず、どこか冷ややかだ。

滅びゆく世界。秩序が失われていく。

「運命に抗うか。酔狂な奴らだ」

「神様っているのかな」

ミーナはぼつりと呟いた。「にわかには信じられないわ」

それから暫くして、ミーナはすばるに話しかける。

「ねえ、兄さん。兄さんは自分がどうしてここにいるかってことを考えたことはある？」

「……いきなりどうしたんです？ 元気が取り柄のミーナらしくないですね」

「私、どうすればいいのかわからないのよ。私が今ここにいるのは、一つの運命なんだよ。運命っていうのは予め用意されているもので、私たちはそれに従って生きている。……だけど、いきなり魔法とか世界を創った神様を倒せだなんて言われてもどうしたらいいのか分からないよ」

「運命なんて」

そんなの決まっていない。

「……うん、そうだね。そうなのかもしれない。すばる兄さんが言いたいことは分かるよ。だけど、そういうことじゃないの。全て

が始めから用意されているものなんて、この世には存在しない。兄さんも私も含めて、誰かが行動を起こした結果が『運命』なのよ。予め用意されていたって、一人一人の行動が運命の形を変えることもある」

彼女は哀しそうに笑った。

「あなたが忘れてしまった記憶は『霧島すばる』という、他ならぬ自分のことだった」

点で繋がる世界。

ミーナ、いや彼女が

レイチエルが

生きていた時代が

全ての始まりではなかった。

「生まれ変わりの連鎖は私たちが始まりなのよ」

滅びてゆく世界

。

f a n a t i c i s m (前書き)

すばる視点です。

『思い出してよ』

彼女は何かを知っているのでしょうか。思い出せと言われても、知らないものはどうしようもないのですが。 いや、そうじゃないですよ。 そういう問題ではないことを私は知っていたはずでしたのに。 どんなことにせよ、知らないままじゃ駄目です。 分かるう

としなければ、それは永遠に分らないということなのです。 ある日突然やって来た鈴という少女。 彼女は自らのことを転生者だと言いました。 それは本当なのでしょうか。

鈴の母親は至って普通の人に見えます。 やや頑固そうですが。 でも、こういう人って結構いるんですよ。 ……私の周りに限ってかもしれません。 彼女の母親を追い返すのにはサクラも大変苦労したそうですよ。

「どうした？ すばる」

ああ、噂をすれば何とやらですね。 当人がお出ましです。 ちょうどいいところに来たとは言わずに、私は謎かけと称して彼に訊いてみました。

「前世というものは憶えているものなのでしょうか」

「そんなわけないだろう」

即答です。

「やっぱりそういうものなんですかね……」

「ああ。 記憶を受け継ぐことは不可能だ。 普通はな」

「??」

「中には教えたこともないのに母国語以外の言葉を喋れる五歳児がいたり、戦争を経験した男の記憶を持つ少女がいたりする。 それが本当かどうかは定かではないが、事実彼らは事細かくそれを語る。 また、身体的特徴を受け継ぐ子供もいるらしい。 現に」

サクラは鈴を見やった。 彼女はクリスマスと一緒にいた。 楽しそうに

遊んでいるように見える。歳が近いせいか、気が合うのだろう。

「現に、鈴は自分がまったくの他人だったと言っている。自分は男だったと。その証拠に、彼女は言動が男っぽいだらう？」

「性同一性障害かもしれませんよ」

「僕もその意見に賛成だ。彼女が意図的に口で騙かたっているのは有り得る話だし、何より『前世の自分』を証明できるものが何も無い。詰まる所、証拠がなければ何も証明できないんだ」

「嘘じゃないよ」

そう言ったのは、ミーナだった。いつの間に来ていたのでしょ
か。

「嘘じゃないよ。鈴の言っていることは嘘じゃない」
なぜ言い切れるのか。

ミーナは変わってしまった。彼女は私の知っている彼女ではな
った。まるで別人のような。いつからなのでしょうが、ミーナは随分と大人びた喋り方になっ
ていました。サクラもそれに気付いたらしく、怪訝な顔つきをして
います。いえ、もしかしたらミーナが私たちが導き出した仮定に反
論したからかもしれません。

「全てはフローラ様が知っているわ」

「『フローラ様』？」

彼女は神を崇めているかのような調子で言った。フローラとは、
つい最近クリフトを探してやって来た『魔女』のことです。たった

数日で、彼女はミーナを洗脳してしまっただようです。私はぞつとして魔女の姿を探しました。魔女は私に気付くとにやりと笑いました。何とも形容し難い。まるで蛇が格好の獲物を見つけたかのような。目をしていました。そして、私にこう言ったのです。

「わしがお主の忘れた記憶こぼを思い出させてやる。この娘のように
な」

チャコと別れた後、僕はヒバリが来るのを待っていた。彼が僕を追いかけて来ているのは知っている。勝手に事務所に戻ったら、入れ違いになってしまいうに違いなかった。

視界の端に白いものが映った。僕は顔を上げた。

雪だ。

いつの間にか空は鉛色になっていた。車の喧しい走行音も聞こえなかった。時間が止まってしまったかのように思えた。

「こんなとこにいたのかよ」

息を切らしてやって来た、背が高く顔立ちの整った青年。彼は紺のピーコートを羽織っていた。事務所を出る時、雪はすでに降っていたのかもしれない。僕が気付かなかったただけで。

「ほら、戻ろう。風邪引くぜ」

その言葉を聞いたら何故だか無性に泣きたくなった。彼はどうして今、僕の前にいるのだろう。放っておいてくれれば、僕は。

「俺、結構好きだぜ」

ヒバリは唐突に言った。「晴れている日よりも、こういう天気の日の方が好きだ」

それは僕に対する当てつけなのだろうか。雪は、嫌いだ。

「まあ、そう邪険するなよ。ちゃんと理由があるんだ」

「理由？」

「ああ。でも、教えない」

「何だよ？」

するとヒバリは意地の悪い笑みを浮かべて「お前が素直じゃねーから！」と言った。

「意味分かんないよ!!!」

僕は思わず拳を掲げて立ち上がった。ヒバリはさして驚く様子も

なく、昇降口まで走って逃げる。

「危ない危ない。……さては凶星だな？」
言葉に詰まった。

こういう時、ヒバリはメグリヤの生まれ変わりなんだなと実感させられる。たとえ記憶がなくなるとも彼女は彼女のままだった。

その時、ふいに身体が宙に浮いた。天と地が逆さまになる。いつ近づいて来たのか、ヒバリが僕を担いだのだった。

「さて、帰るか」

ヒバリはそのままスタスタと歩き始めた。

「ちよっ、降りしてよ！ このまま帰るつもり?!」

「降りしたら逃げるじゃん」

ヒバリは当然のように言い放つ。

メグリヤ、君はいつも手厳しいよ……。

「記憶なんて」

すばるはフローラから視線を放さなかった。

「忘れてしまった記憶^{もの}なんて、そんなものいりません」
それが彼の答えだった。

フローラは理解できないと言うように眉を顰めた。

「記憶を取り戻したくないと言うのか。……お主、置いて行かれろぞ。これから皆、記憶を取り戻していく。それなのにお主は思い出したいくないとそれを拒む。それでは、これから先に起こる戦いについていけぬ。戦いは迫っているのじゃ」

「つかぬことをお尋ねしますが」

「何じゃ？」

話の腰を折られたフローラはやや不服そうだったが、ちゃんと応対した。

「仮に神を倒しに行くとして、どうやって神がいるところまで行くのでしょうか」

「ふん、愚問じゃな。無論、魔法を使って『神の国』まで行くのじゃよ」

God bless you. (前書き)

更新遅くなりました。すみません(^^)

「クリス、早くしないと仕事に遅れるぜ？」

「分かってるよチャコ。だからもうちよつと寝かせてよ」

「……やれやれ。この調子じゃいつまで経っても起きやしねえな」
チャコは呆れたように言った後、ふらりとどこかへ行ってしまった。

彼は僕の頼りになる友人である。いつの頃かはつきり覚えていないくらい昔から、チャコは僕の傍にいた。

どこからともなく現れては取り留めのない話をして帰っていく。
チャコが普段どこににいるのか僕は知らないし、飼い猫なのか野良猫なのかですらも知らない。

そもそも、なぜ猫と喋れるのかつて？ なるほど、確かにそれは誰もが疑問に思うだろう。だが、それは至極簡単な理由だった。僕が猫の言葉を理解できるのではなく、チャコが人間の言葉を理解し喋れるからだ。

「……って、しまった！ 寝すぎした！！」

今この状態が嵐の前の静けさ、ぬるま湯に浸かっているようなものだということは分かっているのだが、フローラが仲間になったことにより僕にとっての明瞭な『敵』という存在がなくなってしまうため、どうにも緊張感が生まれない。

丸くなったものだと思う。自ら『敵』を作っていた頃もあったと言っのに。

僕は壁に立てかけてある真っ白な大鎌を手を取った。これが無ければ執行人はできない。それから僕はあることに気付き、思わず苦笑した。

人を殺すのは嫌だと言っておきながら、その実平気で人を傷つける仕事を請け負っている。

「……さてと。これ以上遅れると、協会のお偉い様方に怒られて

しまつな」

僕は十三階建てマンションの十二階　そこにヒバリが住んでいる。今はどこかに出かけているのか、姿は見当たらないが

にある開け放たれた窓から躊躇うことなく飛び降りた。それから例の白い鎌を取り出し、大きく振りかぶる。すると、空中に魔法陣が現れた。

クリスはふわりと魔法陣に着地する。

「チャコ、いる？」

猫の名を呼んだ。

魔法陣から出てきたチャコはクリスを見、「おつ、やっと仕事をする気になったか？」と欠伸をしながら尋ねる。そう、先程の猫

チャコ　はクリスの『使い魔』だったのだ。

「今度の獲物はどこにいる？」

チャコはにやりと笑う。楽しくて仕方がないといった様子だ。

「もうすぐ見えるよ」

クリスは空を移動できるように風を巻き起こし、マンションより高いところまで登って行った。

「ほら」

何かを見つけたかのように地上にある一点を凝視する。

「あそこにいるみたいだ」

一人と一匹は目的地へ行くと静かに着陸した。そこには不良と見えるガラの悪い三人組の青年が溜まっていた。

「こんにちは、お兄さんたち」

クリスは無邪気に笑いかけた。すると、ジャケットの背中部分で踊っている大きな龍がトレードマークとも言える男が厳いかつい顔をして彼に詰め寄る。

「お前、『執行人』だろ！俺たちに何の用だよ！？」

「ヒヒッ。恐れ慄くどころか喧嘩を売るとは、馬鹿な奴だな」チャコは嘲るように笑った。

「何だと！？こんなの、ただのガキじゃねえか！！」

龍の男が馬鹿にされたことに怒った髪の長い男が立ち上がった。「信じられない馬鹿だ」というチャコの呟きを彼が知る由もなかった。なぜなら、すでにその男の首は胴体から切り離されていたからだ。

胴体だけとなった髪の長い男は血飛沫を上げてその場に倒れる。それを見た龍の男が短く悲鳴を上げた。逃げようとする。だが、チャコが龍の男の逃げ道を奪ってしまった。

「あゝあつ、つつまんねーの！」

虎縞の猫はそう言いながらも不敵な笑みを浮かべている。逃げ道はもうない。後ろから迫り来るのが何なのか、龍の男はもう気付いていた。

金髪青目の少年、得体が知れない。いや、彼が執行人だということとは知っている。そういうことではないのだ。

彼の冷酷無比な瞳は年齢に伴っていない。

白く輝く刀身。

「いいのか？」

「何が」

クリスは鎌に付着した血液を拭き取りながら振り返った。彼は冷めた目をしていた。

「あいつら、死んじまったぜ。協会の意思に反するんじゃないのか？」

「死んではいないよ」

クリスは、一番奥にいた男を見やる。「獲物ターゲットが一人残っていれば、協会のルールは守られていることになるんだ」

すると、冷静に成り行きを見守っていたその男は、彼らのやり取りを見て初めて口を開いた。

「強い子供ガキだな」

「アハツ！ 聞いたチャコ？」

クリフトは嬉しそうに笑う。「一般市民に褒められたのはこれが初めてだよね！」

「皮肉かもしれないぞ？」

「だつてさあ、他の人たちって皮肉すら言ってくれなかったでしょう？」

男はじろりとクリスを睨む。クリスはアハハっ！ と両手を挙げた。どこか楽しげな様子だ。

「お兄さんには何にもしないよ？ だつて割に合わないもん」

「お前は一体何者だ？」

「何だよ、分かつてるくせに。僕は『執行人』だつてば。お兄さんの友達が死んじゃつたの、見てなかつたの？」

そうじゃない、と男は言った。

「なぜ『何も知らない純粹無垢な子供』のフリをするんだと訊いている」

「？ してないよ？」

「お前の目的は何だ？」

男の鋭い眼光がクリスを捉える。

「何それ、意味分かんないし」

クリスはうんざりしていた。それから彼は己の額をぴしゃりと叩く。降参、と言うようかのように。

「……君は僕の正体を知っているのか？」

「さあな、知らねえよ。ただ、お前がただのガキじゃねえってことだけは分かる」

「……そこまで頭が回るのに、そんなところで燻くすっているなんてもつたないね。どうだい、『LEC』に来ないか？ 僕が紹介してやるよ」

「悪いが遠慮する。平気で人殺しをする連中の仲間になるつもりはないからな」

「ふうん。連行される覚悟はできているかい？」

「覚悟ならいくらでもある。それがヤクザだ。……ただ、連行されるつもりは毛頭ないぜ」

「そう。すごく残念だ」

クリスは十字を切った。

「神の御加護を」

「お前の演技は心底怖い……」
チャコは若干引いていた。だがそこは長年の付き合い、何とかなるものだ。すぐに何とでもなかったかのようになって、「じゃ、またな」とクリフトが描いた魔法陣の中へ消えて行く。

サクラの探偵事務所はすぐそこだ。恐らく上司はそこにいるだろう。罪人の刑を執行する執行人は、上司である魔女に任務報告をしなければならぬのだ。彼はそのまま事務所に向かった。

黒い制服を着ていたので、飛んだ血はさほど目立たなかったが、臭いはずいだろうなということに気付いた。制服は本部にしか予備がない。だが、彼は本部がどこにあるのか覚えていなかった。先にも申し上げた通り、クリスは今まで自分が何をしてきたのか覚えていないのだ。どちらにしろ、フローラの元に行かなければならぬのだった。

そうこう考えている間に事務所の目前まで来てしまった。ノックをする。返事はなかった。ノブに手をかけてみると、扉はすんなり開いた。中から口論の声が聞こえる。すばるとフローラだ。

ちよつとマズい雰囲気かな。

そう思った時、はつきりとした言葉が耳に入った。それはフローラが発したものだだった。

「『神の国』に行くのじゃよ。そうすれば、憎き神を倒しに行けるじゃろっ」

神を倒せるだつて？ 生まれ変わりの連鎖を終わらせることができるといふのか？

僕はそれ以上何も考えられなくなった。

「……それは、どうやって行けばいいんだ？」

「クリスくん？」

「クリスカ。またタイミング良くやって来たものじゃの
説明してやる、とフローラはその場にいる全員を集めた

。

t h e m a t t e r w a s c o m p l i c a t e d b e y o n d a

もっと作品を面白いものにしてよう思った結果、三日に一度くらいの更新というのが何か普通になってしまいました。

ちなみに自分、学生です。来週からテスト週間です。まるまる一週間（または一週間以上）更新できない恐れがあります。申し訳ございません（T-T）　こんな駄作を、それでも楽しみにしてください方、これからもよろしくお願いします。

t h e m a t t e r w a s c o m p l i c a t e d b e y o n d a

重々しい空気の中、フローラは『神の国』のことを説明し始める。彼女はまず最初にこう言った。

「神の国は、この世界のどこかにあるんじゃない？」

「それは……！」

鈴は息を飲む。

「何てアバウトな説明なんでしょうかね……」

すばるは困ったように言った。

「まあ、そうがっかりするでない。確かにわたしは神の国がこの世界のどこかにあると言ったが、探す手掛かりがないとは言っておらぬぞ？」

「単刀直入に教えてちょうだい。私、まどろっこしい言い回しは嫌いなのだ」

ミーナは頬を膨らませて言った。フローラは苦笑してそれを了承した。その時、ちょうどサクラが戻って来た。彼はフローラに頼まれ、いや、正確に言うと言われたのだが、『LEC』本部にある物を引き取りに行ったのだった。

「ほら、持って来たぞ」

ほとんど投げるような感じで黒い袋に包まれた『それ』をフローラに手渡したサクラは、使い走りをさせられたことが相当嫌だったらしく、いつも以上に眉間に皺が寄っている。

「イライラし過ぎは良くないわよ、サクラ。早くに禿げても知らないわよ？」

「うるさい、黙れ」

サクラは近くにあった椅子に座ると、疲れを滲ませて言った。いつものような覇気がない。

「何じゃ、つまらぬ奴じゃのう」

フローラは袋を探る。中身は水晶だった。

「これは？」

鈴が物珍しげに近寄って来た。

「『真実』だよ」僕がフローラに代わって答える。

「その水晶は『真実』と呼ばれているんだ　　ネーミングセンス？　　そんなの、僕の知ったこつちやないよ　　。　　お察しの通りその道具は魔力を帯びていて、事象を映すことができる。生産量が限りなく少ないせいか、僕ら上層部の人間でも中々お目にかかることができないマジックアイテムだ。　　こんな貴重なものをよく貸してくれたね」

「まあ、それは何だ。コネというもののか」

フローラはにやりと笑った。彼女の笑みの理由が何なのかは、あえて聞かないことにしておこう。

「とにかく、『真実』があれば神の居所は知ることができるのじや。じゃがのう……」

フローラは溜息をついた。

「『真実』は、真実を目の当たりにせんとその能力を發揮してくれぬという欠点があるのじや。そう、例えば　　」

フローラはビシッとすばるを指した。

「お主の存在は未だに謎のままじゃ。前世が誰であつたのかを知り、お主自身がそれを認めぬ限り、この水晶は使えまい。無論、それは誰にでも言えることじゃぞ？　　サクラもいい加減魔法の存在を信じぬか」

サクラはフンと鼻で笑った。

「仮に僕が魔法を信じ神の国に行ったとして、何のメリットがあるんだ。生まれ変わりの連鎖だつて？　　ふん、くだらない。どうせ自分を忘れてしまうのならそのままにしておけばいいじゃないか。わざわざ君たちが妄信している『神』とやらを怒らす必要はないし、秩序を乱す必要もない」

それは。

それは、記憶保有者に対して言うてはいけないことだった。そう、

特に鈴には。

「『くだらない』だつて!？」

案の定、彼女　いや、彼と言つべき?　はかつとなつて立ち上がった。

「記憶保有者たちがどれだけ辛い思いして生きてんのか、お前分かつてんのかよ!?　故郷とか一緒にいた仲間とかそういうもん全部失つて、それでも生きてる奴らのこと分かつててそんなこと言うのかよ!!!」

それでもサクラの落ち着いた表情は変わらず。「ああ、そうだ」

「ふざけんな!!!」

鈴は何かを取りだした。あの世界には無かつたもの。

アサルトライフルだ。彼女は銃口をサクラに向けていた。

「殺す!!!　絶対殺してやる!!!」

「鈴、冷静になつてよ!」

僕らは暴れる鈴を取り押さえた。鈴は悔しそうにサクラを睨んだ。もうサクラに銃を向けようとはしなかつた。多分大丈夫だ。僕は鈴を解放した。彼女はどつと床に座り込んだ。その瞳には精気の色がなかつた。疲れているようにも見えた。僕より彼女の方がやりきれない思いを持っているのは明らかだつた。

「……………どうした?」

鈴の瞳に突然色が戻つた。そして、それは徐々に驚愕へと変わつていく。彼女の視線の先にあるもの、それはあの水晶だつた。彼女は『真実』を見ていた。

鈴は震える声で言つた。そう、『彼』に。

「あんた……………まさか、姉ちゃんなのか?」

t h e m a t t e r w a s c o m p l i c a t e d b e y o n d a

超・短いです。すみません……。前回区切りの悪いところで終わっちゃったので、こんなことになってしまいました(T|T)
配分に気をつけます、ハイ。

t h e m a t t e r w a s c o m p l i c a t e d b e y o n d a

「僕が……？ そんなわけないだろう」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに切り捨てたのはサクラだった。だが、鈴は確信を持っていた。彼が『玲』であったことは必然なのだ。なぜなら。

「『真実』が、あんたのことを『玲』だと言っていているんだよ」隣にいるサクラから視線を外し、鈴はもう一度『真実』を見やる。そこには自分の姿が映っていた。

何事も偽ることのできない水晶。そして、鈴の隣にいるのは。

『玲』だ。

そこには、あの日あの時の彼女の姿が映っていた。

「思い出してよ、『玲』。離れたくないって言ったのは君じゃないか。だからずっと俺たち、一緒にいるよ」

思い出してはいけない。

「……………ッ！！」

思い出シテハイケナイ。

「サクラっ、大丈夫?!」

ミーナが駆け寄る。サクラは心配無用だと手で制した。だが、どこか顔色が悪い。

「でも……………」

「ただの頭痛だよ」

そうは言ってみたものの、この締め付けるような痛みがただの頭痛だとは到底思えなかった。
聞き憶えのない声が言う。

『思い出シタラ後悔スルヨ』。

t h e m a t t e r w a s c o m p l i c a t e d b e y o n d a

次回は話を進展させる方向でいきたいと思います！ 本当に短くてすみませんでした(T|T)

o n e c a n n e v e r b e c o m p l e t e l y s a t i s f i e

更新遅くなってすみません（T|T） テスト終わった後の土日は
ずっとゲームしていました。そのせいで更新が……いえ、何でもな
いです。

サクラ視点です。そして、少しだけ話を進展させました。

『思イ出シタラ後悔スルヨ』

本当は分かっている。分かっているけど思い出したくないだけで……。

「どうしましたか？ サクラ」

「……すばる。いや、何でもない。ただ信じられないだけだ。生まれ変わりとか能力者だとか、そんなもの信じたくない。それを肯定してしまつたら、自分自身を見失いそうになる。」

「彼らが羨ましいんですか？」

すばるはクリスたちを見て言った。その視線の先には、皮肉を言い合うクリスと鈴、記憶を取り戻したおかげですっかりこの光景を見慣れてしまったのか笑って見ているミーナ、そして記憶がないにも関わらずその中に溶け込めるヒバリがいた。

「そういうわけじゃない」

記憶を取り戻すことに何の意味があるのか。呪われた運命を断ち切るのなら、記憶を取り戻さない方が良いのではないのか。僕らは何ノ為ニ生キテイル？

「……訂正する」

「え？」

「確かに羨ましいんだろうな、ああやって必死に生きていける奴らが」

すると、すばるは彼らから視線を離さないまま言った。

「あんたは俺に似ている」

「は？」

「全てを否定して『生きてきた』俺に似ているんだ」
『生きてきた』？ それはどういう……。

「すばる、お前記憶が」

彼は少しだけ笑って頷いた。「段々思い出してきたんだ。俺がどんな奴だったかってことを」

大丈夫だ、とすばるは言う。

「あんたもいずれ思い出すさ。あんた自身のことも俺たちのことも、な」

取り残された気がした。

何の確証もないのに、こいつだけは記憶を取り戻さないんじゃないかって思っていた。何となくそんな気がしていた。

そうじゃない、僕は理由が欲しかっただけだ。どれだけ頭から振り払っても忘れることができない『かつての記憶』についての話を嘘だ戯言だと誤魔化するための理由。後付けのような理由が必要だったからだ。

彼女の言う通り、結局僕らは断ち切れぬ連鎖に抗うことは無理なのかもしれない。こうして僕らが集まってしまっている時点で、すでに忌まわしき神が引いたレールの上を歩いているだけに過ぎないのではないか。

いずれ思い出す、確かにそれは有り得る話だった。現にミーナはフローラの手によって記憶を取り戻していたし、すばるは記憶保有

者の彼らと接することによって記憶を取り戻しつつある。だが、それならヒバリはどうなるんだ？

ヒバリはすばるよりも元から記憶を保有していたクリフトや鈴と行動を共にしていたことが多かった。それなのに、彼らと関わる前と後の言動の違いがまったく見られない。生前もあんな感じだったからか？ それとも。

「何ぼーっとしてんだ？ 考え事か？ それとも、悩み事？」

ヒバリだった。……あれ？ こいつ、さっきここにいたか？ 忘れたな。まあ、そんなことはどうでもいい。こいつのお節介にはウンザリだ。

「ああそつだ。悩み事、と言えるものかどうかは不明だがな」

『思い出したら後悔する』。

フン、上等だ。記憶を取り戻し、前世の記憶とやらが後悔するに値するものが見極めてやる。

「フローラ！」

僕が呼ぶと、フローラはにやりと笑って「なんじゃ。前世を思い出す決心はついたのかの？」と問い質した。

「決心なんて大したものじゃない。ただの気まぐれだよ」

battle 1 (前書き)

最近ヒバリの出番が少ないことに今更ながら気付きました。
すばる(ゼロ)とミーナ(レイチエル)の関係が複雑になってきて、
何だか力オスなことに……。

「鈴つ、ターゲットの一人がそっちに向かった!」

「いちいち言わなくても分かってるよクリス! っと、逃

がしはしないぜ?!」

鈴は銃口を男ターゲットに向けて引き金を引いた。硝煙と共に男が倒れる。

それを物陰で見ている罪人が一人。

「へへっ……! あいつら、俺の存在を忘れてやがるな。この隙に逃げて」

「生憎だが、それは無理なようだな」

やや低めだが、中性的と言えそうだとも言える声が罪人の耳に入ってきた。システム・ウェポンを愛用しているその青年は、冷めた目をこちらに向けていた。

「ヒッ……!!」

光が銃口から迸り、罪人の肩を掠める。罪人は一瞬悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちた。

「すばる兄さんっ、今のは何?! どうしてこの人は倒れたの? ……いいえ、そう言うべきではないわね。そうじゃなくて、どうして弾薬ではなく光が出てきたの?」

事の成り行きを見守っていたミーナは不思議に思っすばるに訊いた。

「これはただの銃じゃない」

魔法弾が発射できるよう独自に改良したのだ。普通の弾薬と違い、金がかからずに済む。そしてこの武器の最大の魅力は、魔力切れになっても他の能力者に銃を渡せば再び使えるようになることだ。

「奴フロラに調べてもらったところ、俺は雷属性能力者だった。弾丸の代わりに魔法弾を撃つただけだが、雷属性だったために光が出ただけにしか見えなかったようだな」

「つまり、あの人は電流で気絶してしまったということ?」

「ああ。炎属性のお前が使ったら、火炎放射器みたいな感じになるんじゃないか？」

「そうね。……すばる兄さん」

「何だ？」

「……うつん、やっぱ何でもない」

「？ そうか」

さすが双子だな。話の切り出し方や言葉の濁し方がそっくりだ。

「……………」『ゼロ』

ミーナはすばるを呼んだ。すばるは表情を硬くした。

「俺はもう『ゼロ』じゃない」

「だけど」

「あんたは過去に囚われ過ぎているんだ。終わったことを考えていたところで何も変わりはない」

その時、ヒバリとサクラが合流してきた。二人はそれぞれ得物を手にしていた。

「こっちはノルマクリアだぜ！」

今より数時間前の話。

「……ふむ。どうやら神の国に行くためにはLEC本部にある『封印の書』を手に入れなければならぬらしいのう」

『真実』を覗きこんだフローラは唸るように言った。

「『封印の書』？」

「トップ3のメンバー以外は貸出禁止だと言われている書物のことだ。僕もフローラも実物を見たことがない」

「つまり、『封印の書』を手に入れるためにはトップ3に入らなければならぬということね？」

すると鈴は不満げな顔をした。

「そんなまどろっこしいことをしなくてもさあ、盗めばいいじゃん？」

何とも物騒な意見である。クリスはその提案を即座に却下した。

「リスクが高過ぎるよ。ただ閲覧するだけで済むのなら、わざわざ事を荒げるような真似をする必要はない」

それなら、とヒバリが言葉を拾った。

「俺たちもLECのメンバーになればいい。そうすりゃ誰か一人くらいはトップ3に入れるだろうし、その神様とやらに戦う時に備えて、の修行にもなる。良い方法だと思わないか？」

b a t t l e 1 (後書き)

戦闘シーンを書くのが大好きです。思いつきし駄文ですが(笑)
サクラ(レイ)の記憶を取り戻す方向で書いていこうかなと予定
しております。

Make up(前書き)

…と言いつつも、サクラの出番が全然ない回になってしまいました。

「こっちはノルマクリアだぜ！」

ヒバリはピースサインを前に突き出した。レイチエルたちもどうやらノルマをクリアしていたらしく、目の前に気絶した罪人がお縄となつて転がっている。

「何だ、もう終わっちゃったのか。せつかく俺が手伝つてやろうと思つたのになあ」

ヒバリは余裕綽々のすばるを見て残念そうに肩を竦めた。彼はヒバリの言葉を軽く受け流した。どうでもいいと言うような感じだった。ヒバリは珍しくもため息をついて「まったく、前世とか記憶とか俺には意味が分からないよ。記憶が戻つた兄さんは、まるで別人みたいだ」

「そうか？」

「そっだよ。言葉遣いからして前と全然違つて」ヒバリは口を尖らせて言う。

「どうだつていいでしょう、そんなことは」

突き放すように言ったのはレイチエルだった。

「ゼロの……兄さんの何が変わつたつて、あなたには関係ないことよ。何も思い出せないくせに」

ヒバリはむっとして言い返す。

「何も思い出せない？ 何だよそれ、意味分かんねえよ。最近のお前、おかしいぜ」

レイチエルは首を横に振り、悲しげな表情を彼に向けた。

「違うわ……！ おかしいのはあなたの方なのよ！ どうして何も思い出さないの？ どうして『私たち』のことを憶えていないの？ 何で思い出そうともしないのよ！！ これじゃあまりにも……」

何だ？ 今、何て言った？ それに俺は……。

「言い過ぎだ」

怒っている ように見える 彼女に、諭すように声をかけたのは兄さんだった。

「でもっ」

「ヒバリも悪気があって言ったわけじゃない。そうだろう？」

「あ、ああ……」

兄さんは俺が頷いたのを確かめると、再び彼女に向き直った。

「これは俺の問題だ。あんたが介入することじゃない」

「そうね。……余計なお世話だったわ」

「取り込み中悪いが。鈴たちがまだ戻って来ていないみたいだ、探しに行った方がいいかもしれない」

サクラは少しだけ申し訳なさそうに言った。うん、完璧に蚊帳の外だったよなコイツ。だけど俺は正直ほっとしていた。サクラが話を切り替えてくれなければ、この重苦しい空気はずっと続いていかもしれない。ナイスタイミングだ。

「じゃあ俺とサクラは向こうの方を探してくるよ。兄さんたちはあっちに行ってみてくれ」

「分かった」

「それじゃ、あいつらが見つかったらまたここに集合な！」

ヒバリとサクラの姿が見えなくなった後、ゼロは銃の安全性を確
認し、私に『命令』した。

「行くぞ、ミーナ」

「嫌よ」

私は俯いたまま返答した。先を行こうとしていたゼロが立ち止まり、困惑気味にこちらを振り返ったのが見えた。

「今日はやけに機嫌が悪いな」

「どうしてだと思っ？」

「さあね」

ゼロはやれやれと言うように肩を竦めた。まだ話が続くのかとうんざりしているようにも見えた。けれど、私にとって話を途中で終わらせることなどありえないのだった。だって、これはとても重要な。。。

「私は『レイチエル』よ、ミーナって呼ばないで。それにあなたは今も昔も『ゼロ』でしょう？ …… 『すばる』は死んだの、あなたが記憶を取り戻した時にね。だから、今と昔で名前が違うのなんて別に気にしなくてもいいじゃない」

これは必死の言い分だった。だって、私は私でゼロはゼロだから。何を言われたのか分からないというように、一瞬ゼロは目を丸くした。だが、すぐにいつも通りの冷静な表情に戻ると、苦笑して「言っていることが無茶苦茶だな。分かった、それであんたの機嫌が直るならそうしよう」と言った。

「クリスたちを探しに行くんだろう？」 『レイチエル』

「?!」

私は思わずびっくりしてしまった。なぜかって？

だって、ゼロが優しく微笑んでいたんだもん。ゼロが笑っているのを見たの、初めてかもしれない。

「どうした？ 行くぞ」

「ええっ、分かってるわよ!!」

今日はいい日になりそうだ。

make up (後書き)

”外の世界”よりゼロが冷たい人間になってしまったような気がしたので、レイチエルと喧嘩(?)して仲直りする、という形で本来のゼロに戻ってもらいました(^^ゞ
問題はまだまだありますが、そこは何とかなる……はず(笑)

「政府の犬め！！ これでも食らえ！！」

ターゲットが僕に向かって銃を乱射した。僕はそれをかわし、すでに汚れきっている鎌をターゲットに振り下ろした。

鮮血が飛び散る。それと共に、ターゲットはその場に倒れた。動かない。

もう二度と。

鈴がそれを回収しに来た。彼女は携帯を取り出すと、フロアに死体の処理を頼んだ。

複数犯なら証人は一人でいい。単独犯であれば、LECは罪人を殺さない。罪を償わせた後に殺す、それが僕らのやり方だった。

返り血を浴びた。鼻にくる独特な臭いが辺りに充満した。首を狩り取られた罪人は、切断面から肉塊を醜く曝け出していた。

空は依然として曇っている。今にも雨が降りそうな勢いだった。

雨なら嫌いじゃない。

その時、鈴の携帯が鳴った。

「もしもし」

鈴は二、三受け答えをすると電話を切った。彼女は振り返って「ヒバリたちの方は、もう終わってみたいだぜ」と言った。その口調はどこか皮肉めいていた。僕にはその理由が分かった。

「僕が真剣に仕事をしなかったことに怒っているのか」

鈴は不機嫌そうな表情を崩さないまま頷いた。

「人の命を弄ぶなんて」

「許せない？」

「そうだ」

処刑が確定している罪人^{ターゲット}を追いつめては逃がし、追いつめては逃がしの繰り返しだった。罪人を追う僕の後についてきた鈴はその度

に無然としていた。

生きるか死ぬかの瀬戸際。

僕はそれを楽しんでいた。

言われるまでもない。もう狂っている、何もかも

『斉木』が死ぬ前に望んだもの。

それは狂気だ。

「神はいる。僕らは神の玩具に過ぎない。戦うだけの人生なんてもううんざりだ。それでも君は神を信じるのか？」

滅びゆく世界。何もかもが壊れている。

大切だったものはすでに失われていた。もはや考えることに何の意味もない。

感覚の麻痺。

「信じる信じないはともかく」

鈴は淡々と言った。

「オレは現実を誤魔化さない」

それは。

そんな風に思えるのは。

僕は鎌を担ぎ直す。

「それはまた、君らしい答えだね」

猫の鳴き声があった。

「チャコー！」

虎縞の猫の名を呼んだ。猫は欠伸を噛み殺しながら、どこからと

もなくやって来ると、ふわりとクリスの右肩に降り立った。

「もう終わっちまったのかよ。つまんねえな」

チャコは人間の声でも、ましてや動物の声でもない独特な機械音に近い　声だった。鈴は突然の出来事にびっくりしている。

「ああ？　何だ、このガキ。お前の『トモダチ』か？」

チャコはわざと強調して言った。クリスは冷ややかな態度で頷いた。鈴が反論しようとしたところを彼は制して「そういうことにしておこう」と言った。

否定するとややこしいことになりそうだ。

鈴はチャコを一瞥した後、納得した。

「鈴、この猫は僕の友人だ。チャコって言うんだ。　チャコ、彼女は鈴だ」

するとチャコは「あつ」と手を打った。

「例のマセガキか」

「なっ?!　オレはそんなんじゃないっ!!」

鈴はチャコに銃を突きつけた。チャコはおどけるように笑う。

「やつぱガキだな」

「デメエっ!!」

鈴が振り下ろした手をチャコはひらりとかわす。

「おっ、やる気か？　オレは別に構わないぞ？　面白いことなら大歓迎だ！」

「はあ……。チャコ、いい加減にしなよ。大人げないなあ」

「ヒヒッ！　法に触れなくて楽しいことならいいじゃないか。何でも楽しまなきゃ損だぞ、クリス？」

「はあ……」

クリスは再び溜息をついた。

「あつ、いたわ!!　こっちよ!!」

聞き慣れた声に振り返ると、レイチェルとゼロがこちらに向かって来るところだった。

s t a i d (前書き)

主人公たちの過去(前世)を曖昧なままにしてはいけないと思い、補足という形で書いてみました。

全て認めたい。全て愛したい。

何もかも信じて。

けれどそれでは生きていけないことを知っている。

全て否定したい。全て拒絶したい。

何もかも忘れて。

けれどそれでは生きていけないことを知っている。

慈悲深い神はここにはおらず。

罪を裁く神がここにいた。

慈悲深い神はいなくていい。

罪を裁く神がいるのなら。

救いは求めない。ただ懺悔を聞いてくれ。

心が折れるまで追いつめればいい。だってそれが唯一の方法だか

ら。

この呪縛から逃れるための。

何も考えたくないんだ。息が詰まりそうなんだ。もう限界なんだ。

理由が欲しい。

何のために生きている？ 何のために戦う？ なぜ神は試練しか

与えないんだ。

意味。理由。

「つまりお前は、理由さえあればいいのだな？」

もしもいるのだとしたら、神様。

俺はあんたを信じて

これはある人の記憶に過ぎない。これは忘れ去られた記憶の断片である。

絶対者である神は下界を見下ろしていた。愚かな人間共が愚かなことをしているのを冷ややかに見物していた。そう、見物しているだけである。特に何をするわけでもない。

一方、神の使者ではあるが、秩序を嫌うチャールズはそんな主に不満を持っていた。

同じことの繰り返し。それは、創世者でない彼にとって、ただ単に退屈なものであった。

何度も記憶を失い蘇る『英雄』たちとは違い、彼は神によって永

遠の命とやらを約束されているのである。永遠の命、どれほど望んでいたか。それが今、己の手中にあるのだということに歓喜する。秩序から無秩序へ。

彼は『其の人』に暗示をかけ、刺客として『かつての英雄』の元へと送り込んでいる。『其の人』とやらが誰かとは、ここではあえて追求しまい。

チャールズはこれから来るだろう未来について思いを致す。彼の頭には英雄たちの経歴、その末路までしっかりと記録されていた。

「さあて……。これをどう利用して奴らを揺さぶりましょうかねえ？」

下記は『未来』に生きるジャーナリストが残したメモである。

メグリヤグミ
巡矢恵

ある時期を境にして姿を目撃されるようになった女性。国に戦闘用奴隷として飼われていたという噂が流れていたが、詳細は不明。LEC本社ビルにて殺害される。現場に残された証拠からみて、犯人はクリスチアナ・ブランフォードだと判明。

クロサワリン
黒澤玲

ある時期を境にして姿を目撃されるようになった少女。容姿が瓜二つの双子の弟がいたらしい。川の下流で流されてきた彼女を国民が発見し、死亡を確認。生きている彼女を最後に見た者はおらず、詳細は不明である。

クロサワリン
黒澤鈴

ある時期を境にして姿を目撃されるようになった少年。容姿が瓜二つの双子の姉がいたらしい。

川の下流で流されてきた彼を国民が発見し、死亡を確認。彼が最後に目撃されたのは光の楽園に向かう道中だったようだ。城に向かって走り去る彼を見た者の証言によると「鬼のような顔をしていた」とのこと。

元より喜怒哀楽が激しく、場合によっては二重人格かと思わせるほどだったらしい。

それ以外は黒澤（姉）のケースと酷似しているのだが、気のせいだろうか……？

クリスチアナ・ブランフォード

光の楽園の兵士。比較的温和な性格だったようだ。

母国を愛す故に、光の楽園に反発を抱いていた仲間を裏切り、仲間であった巡矢恵を殺害した。殺害の動機は不明。また、その際にLEC本社ビルの社員を皆殺しにしている。

巡矢を含む被害者らを殺害後、LEC本社ビルにて自害。またしても動機は不明である。

精神に異常をきたしていたのではないかと推測。

フローラ

光の楽園の女帝。

『LEC惨殺事件』と同じ時期に謎の失踪を遂げた。また、息子であるチャールズも謎の死を遂げている。

これらの事件に何らかの関わりがあったのではないかと推測している。

ゼロ・ブランフォード

クリスチアナ・ブランフォードの兄。

クリスチアナが自害した翌年、姪のエリザベスを引き取り共に暮らすようになる。

『LEC惨殺事件』の真相を知る人物だと予測されているが、本人

は「何も知らない」との一点張り。
事件以降目立った行動はしなかったが、数年後に姿をくらます。彼の行方を知るものは誰一人いない。

レイチエル・デスペラード

元はと言えば、一国の姫だった女性である。ゼロ・ブランフォードの幼馴染。

事件が一通り静まった後にゼロ、エリザベスと共に暮らすようになる。

『LEC惨殺事件』の真相を知る人物だと予測されているが、同じく「何も知らない」との一点張り。

数年後、姿をくらますことになったゼロの安否を心配しつつも、成長したエリザベスと仲良く暮らしている。

エリザベス・ブランフォード

ゼロ・ブランフォードの姪。それ以外の情報はなく、詳細は不明である。親族がいなくなってしまった現在では、レイチエル・ブランフォードが彼女の世話をしている。

取材に行った仲間が彼女にとある質問をしたところ、「みんなはずっと生きている。だけどベティはここまでだから」と答えたという。
意味不明。

s t a i d (後書き)

あくまでも第三者的な目線で、”外の世界”から少し経った後のことを補足しました。

”外の世界”から”white snow”に移るまでの空白の間、何があったのか、ということとをこれから少しずつですが、書いていこうかなと思います。

長々とすみません、次回は本編へ戻ります(^^ゞ

唐突で申しわけないのですが、私は偉大なるチャールズ様に仕える者でございます。^{わたくし}

私の名をお教えることは、残念ながらできません。これは『神の国』にいる者の掟でございます。未だに下界で燻っている連中とは訳が違うのでございます。下界の連中はまったく憐れなもので、取るに足らないことをいつまでもいつまでもクヨクヨウジウジ悩んでおります。

再会を喜び、仲良しなフリをして戯れるそんな彼らを私は冷ややかな目で見ておりました。

「それで、これからどうする？」

小柄な少女が男勝りな口調で面々に尋ねます。まったく、最年少だというのに無礼な子供ですね。物事を考える、ということを知らないのでしょうか。

すると、少女とさほど変わらない年齢の少年が執行人の証でもある馬鹿でかい鎌を軽々と担ぎながら「とりあえず本部に戻ろう」と答えました。忌々しい鎌と、その真っ白な刀身から滴れ落ちる赤い液体が彼の子供らしさを削いでいることは一目瞭然でした。

和気あいあいとした雰囲気なものにも関わらず、私は思わず身震いをしてしまいました。なぜなら、彼の本性を知っているからです。我が神に近い御方であるチャールズ様は全てを私に教えてくださりました。

あの少年の本性は冷酷、そして非道でございます、間違いありません。私がこう頑なに言い張るのにも、ちゃんとした理由があるのです。それは、チャールズ様が私にくれた『未来』のメモ。それだけではございません、私はしっかりと『未来』で聞いたのです。

チャールズ様のご友人　　と言っても、ただ利害関係が一致す

るだけの希薄な友情ではありますが　　マルス様と彼の^{クリス}の会話を。

「今までどこに隠れていたんだい？」

「易い質問だな。そんなことを聞いてどうするつもりだ」

「まあ、こういう性質^{タチ}なもんでね。その逸材から埃が出るなら何だつてするんだよ、僕は」

「フローラに聞いた通りだったな。お前は偽善者　　いや、策略家だ。自分でも自覚しているのだろう？」

「元々優しさなんて備えていないんだ。あれは……そう、ただの真似事^{まねごと}だよ。困った時にどうすればいいか。それが上手く対処できる人を見つけて真似しているだけ。どうすれば相手に不快感を与えないか知っているだけだ」

……話が逸れましたね。

我が神は全知全能ではありませんが、ご自身がお創りになった世界に興味がありません。チャールズ様の方がよっぽど『彼ら』を気にかけております。

「ねえサクラ、LEC本社ビルってどんなところだった？」

「僕が知るものか」

「何だア？ オマエ、一回行ったことあるんじゃないのか？」

黒髪紅眼の女性に続き、喋る猫が質問を重ねます。ああ、あれが噂の使い魔ですか。聞いたことはありますが、見たのは初めてです。なるほど、喋る猫とは思った以上に不気味ですね。『あんなこと』があったのも無理がありません。

「行ったのは、受付までだ」

「ふーん、じゃあ一緒だな。オレも入会手続きをする時、受付まで行っただけで、他のところには行かせてもらえなかったぜ」

ヒバリは快活に笑って言いました。

私と同じく、それらのやり取りを静かに眺めていたのはゼロという青年でございました。彼は冷めた目で本来の目的を忘れかけていた愚かな一同を一瞥した後、「行こう」と促します。マルス様が彼を気にかける理由が何となく分かったような気がしました。聡明で物静かなマルス様は確かに騒がしい者どもをお嫌いになるでしょうからね。

とまあ、こんな感じにマルス様のこととは分かります。ですがね、私には肝心のチャールズ様の御心が分からないのでございますよ。なぜにしてあのような小娘を玩具にしておられるのでしょうか。あのように浅はかな小娘を、なぜ。

……少々取り乱してしまいました、申し訳ございません。今は違いますね、あの憎々しい小娘はすでに女ではないのです。私が心配する必要ありませんでした。それより、私はとてつもなく罪深いことを考えてしまったことに自己嫌悪してしまいました。私が愛してやまないチャールズ様は心の広い方なので、きっと許してくださいでしょうけど。

目の前にはそびえ立つビル。天に届くのではないかと錯覚してしまいますね。どうやら私が色々と考えている内に、LEC本社ビルに到着してしまっただようです。

why don't you have a doubt?

数時間前。

「これで終わり……か？」

戦いによる勝利を収めて逃げ出そうとした果敢な罪人にみねうちを食らわせて倒した後、ヒバリは溜息をついた。その声には疲労が滲んでいる。

単身、彼が通った道の後には人の山ができていた。刑執行が終わった罪人たちの山である。今回の任務はやけにターゲットが多かった。本社から得た情報によると、どうやら集団で罪を犯していた者たちだったようだ。

屍の山から動く人影が出てきた。だが、それに背を向けていたヒバリは気付かない。撤収しようと銃をしまいこんでさえた。

「死ねえっ!!」

白刃がヒバリ目掛けて振り下ろされる。ヒバリははっとして振り返ったが、もう遅い。今まさに、振り下ろされた刃はヒバリを貫こうとしていた。

その時、バケツをひっくり返したような いや、この表現は適切でない。滝が流れるような、というのが正しいだろう 水が両者の間を分断した。生き延びた罪人が振りかざした刀は留まることのない水流に押され、罪人をよるめかせる。

「大丈夫か？ ヒバリ」

銀色に見えなくもない黒髪と漆黒の瞳を持つ青年が突如として現れる。ヒバリは彼の姿を確認すると、快活に笑った。

「サクラ!! 助けてくれてサンキュな!!」

サクラは軽く頷き、冷やかな目を罪人に向けた。「まだ生き残りがあったのか。フン、無様だな」

いつの間に構えていたのか、彼はためらうことなく銃の引き金を引いた。建物以外何もないこの場所で、銃声が反響した。罪人は断

末魔を上げて倒れた。誰も喋らなかつた。音のない世界。

「お前はいつまで忘れていることができる？」

沈黙を破ったのはサクラだった。

ヒバリは質問の意味が分からず眉を顰めた。サクラはどこか思い詰めた表情をしていた。

そして現在。

「ちよっ、止めるよクリス兄っ！」

「あんまり騒ぐと痛い目見るよ？ 鈴」

「あッ……だからダメだって……!!」

「大丈夫、ここなら絶対見つからないよ」

「や、そういうことじゃ」

「鈴？ 痛っ!!」

突如、後頭部に強烈な痛みを感じたクリスは頭を押さえて呻いた。

「お主ら、そこで何をしておる？」

そこにはフローラの姿があつた。振り上げられた拳が目に入る。

彼女は怪訝な表情を浮かべていた。

「まさか、わしに言えぬようなことではなかるうな……？」

未だ痛みが引かないのか、クリスは渾身の力で殴られた後頭部をさすりながら立ち上がる。そして、無抵抗ということを証明するかのように両手を挙げた。

「あなたが何を誤解しているか知りませんがね。僕らはただ、重役会議を盗み聞きしようとしていただけです。もしかしたら『神

の国』の情報が手に入るかもしれないし」

「む？ そうなのか？ どうもお主の言うことは信用ならんな」

「少しは信用してください。そうだよ、鈴？」

「ああ。そんなことしちゃ駄目だって、オレは反対してるんだけどな」

鈴は信じられないというかのようにクリスを睨みつけた。フローラは拍子抜けしたかのように「そうか……」と言った。

「なんじゃ、つまらん展開じゃのう……」

クリスは子供らしくない、張り付けたような笑みを浮かべながら「あなたが考えているような展開は、どれだけ待っても訪れませんが」と言った。その隣で、鈴は不思議そうに首を傾げていた。傍から見ると何とも奇妙な構図である。

「そうは言っても、言い切ることはできぬじゃろう。むしろわたしとしては、そうなってくれた方が面白くていいのじゃが」

フローラはやりと不敵に笑う。
「ご期待に添えなくて申し訳ありませんね。僕は今でもメグリヤを愛していますよ、残念ながら」

「ふむ。その言葉、しかと胸に刻んでおこう。お主が心変わりした時、思う存分弄んでやるわ。クククツ、その時が楽しみじゃ」

「あははっ、僕もあなたが落胆する姿を是非見てみたいです。あなたほど泣かし甲斐のある方は中々いませんから」

フローラは思いもよらぬ言葉に一瞬怯んだが、すぐに自分のペーソスを取り戻して「ほう……言うようになったのう、クリス。従順なお主はどこに行ってしまったのやら」

するとクリスは わざとらしく 驚いたように「あれ、気付いていなかったんですか？ 僕は元々こういう性格なんですよ」と言った。もちろん笑顔のまま。

お互いにこにこ笑いながら話していて、遠目から見ると仲良さげな雰囲気醸し出している。だが実際にはその笑顔は友好的なものではなく、腹の探り合いといったものである。それを見て、ああは

なりたくない、絶対にならないと心に誓う鈴。

「それでお主ら、どうするんじゃ？」

フローラは唐突に話を変えた。彼女の瞳に皮肉の色が混じっていれば良かったのだが、生憎フローラは真面目な話をしようとしていた。

「『どうする』って、どういうこと？」鈴は先を促す。

フローラは説明するのにもどかしいと言つかのように、やや苛立った口調でそれを告げた。

「重役会議を盗み聞きした理由はどうであれ、それが良いこととは言えぬぞ」

「待って、何で『お主ら』なんだよ?! オレ元々反対してたし、止めようとしてたんだぜ!？」

鈴は一緒にされたのが許せないらしく激怒した。しかしフローラは非情にも「そこにいる時点で同罪じゃ」と切り捨てる。

「まったくわしが見つけたからいいものの、他の輩に見つかったら間違いなく独房行きじゃったろうな」

「なっ……!」

鈴の顔色はサーツと蒼ざめていった。そしてクリスに掴みかかる。「そんなリスクの高いことにオレを巻き込むな!!」と怒鳴った。しかし当の本人はどこ吹く風、「あんまり煩くしていると見つかる

独房行き　　って言ったのに。わざわざ事を荒立てたのは

鈴じゃないか」と言っただけだ。

そんなことは聞いていない。もはや脱力するしかない。

「もういい……」

考えるより先に行動、短絡思考だとも言われる自分がクリスと張り合う、ましてや言い合いに勝つことなど、到底無理な話なのだ。早々にさじを投げてしまった方が時間浪費の削減になることは間違いなかった。

得体の知れない何かがあるんだ。

c a n · t f l y . . . (前書き)

更新遅くなりました(^ | ^ ;)

c a n · t f l y . . .

何もかも無くなればいいのに。

「あれ？」

ふいにレイチエルが後ろを振り返ると、先程までそこにいたはずの鈴とクリスの姿がなかった。

レイチエルはふつと苦笑する。二人が再会した時の険悪な雰囲気にはどうしたものかとハラハラしたが、何だかんだ言ってあの二人は仲が良いのだ。皮肉の言い合いをしながら、それでも一緒に行動しているのを見ると、そう思わずにはいられない。あの頃よりもお互いが生き活きしているように見えるのは彼女の気のせいだろうか。その時、ざわりと心の中で何かが動いた。形のない、はつきりしない何かが過る。彼女はなぜか不安に襲われていた。

何か足りない。そう、なくてはならない何かが。欠落したものの、それが彼女を不安にさせる。何だろうと一瞬首を傾げたが、その正体はすぐに分かった。

メグリヤ。

彼女がここにいないということ。

「ねえ、どうして……？」

言っても無駄だというのに、声に出さずにはいられない。

「何であなただけいないの？ メグ……」

ヒバリがメグリヤの生まれ変わりだと分かっている。けれど、それで納得できるほど自分は出来ちゃいなかった。

彼はあまりにも似ていなさ過ぎる。メグリヤは彼ほど鈍感でも図々しくもなかったはずだ。多分、そのことがより一層レイチエルを不安にさせるのだろう。

喪失感。

「ふうん。今回の罪人はテロリスト七人か」

フローラが手にしているリストを覗き込んだクリスは、あからさまに肩を落として言った。つまらない、と言いたげなのが言葉の端々に滲み出ている。

「最近、雑魚ザコが多いんだよね。もっと大きな事件ヤツを回してよ、フローラ」

「何を言っておるんじや。確かに今回はターゲット数が少ないがの、中々ランクの高いやつを選んで来たのじゃぞ」

フローラは心外だと言わんばかりに大きく肩を竦めた。

クリスと鈴がフローラに退屈だと抗議し、ヒバリは面白がって茶々を入れている。サクラはそれを遠巻きに、しかし迷惑がっているわけでもなく傍観していた。

見慣れた仲間が見慣れぬ光景を繰り広げている。

「……付き合いきれないな」

「ゼロ？」

レイチエルは踵を返すゼロに声をかけた。ゼロは一瞬立ち止まって振り返り、冷然と言った。

「茶番劇はもうたくさんだ。俺は、俺のやり方で生まれ変わりの連鎖を断ち切ってみせる」

「待つ　！」

ヒバリが止めようとした時にはすでに彼の姿はなかった。

「なっ……何だよソレ?! ふざけんなよ!!!」

いち早く我に返った鈴は、突然のことに怒りを露わにした。サク

ラにはそれが、飲み込めない状況を怒りで誤魔化そうとしているように見えた。ヒバリは困ったように苦笑しながら「……ま、アクシデントもツキモノってか？」と軽口を叩く。

それよりも、とクリスはレイチエルを見やった。彼女は打ち拉がれていた。声をかけることも躊躇われた。しかし、彼女はクリスが思っていたよりも強かった。

「行こうよ、みんな」

暫くして顔を上げたレイチエルは、何事もなかったかのように彼らを促した。

思い出すのは記憶の断片。

冬の寒空に浮かぶのは白い月。

昨日よりもはつきり浮かんでいる白い月は、きっとこの世界のことなんてどうでもいいのだろう。

全て無くなってしまえばこんな思いをしなくて済んだ。

考えることができなければこんなことにならなかった。

こうやって何もかも拒んでいることが『逃げ』だということを知っている。

それでも俺は。

「何だよコレっ……!! どうなってんだよ?!」

鈴は驚愕に目を見開いた。目の前にいるのは。

一時間前。

「なあ、ここって……」

鈴はそびえ立つ高いビルを見て引き気味に言った。

忘れたくても忘れられない、あの忌々しい場所。彼女が連れ去られた、あの場所にいま自分はいる。

「まだ残っていたんだ……」

ぼつりと呟くように言うクリス。夢遊病患者のようにフラフラと建物に近づき、ぼんやりとそれを眺めていた。誰よりも一番、ここに訪れるのが億劫だったかもしれない。

「残っているのではない」

フローラはクリスの隣に来て言った。

「これは幻じゃ」

「幻？」ヒバリは訝しげに訊く。

「ヒバリ、わしらがここに来た理由を覚えておるか？ ターゲット 罪人がこ

の近辺に潜んでいるという噂を聞きつけたからじゃ。奴らは幻術に長けておるらしい。じゃから今まで政府が捕まえられなかった」

「なるほどな。ランクが高い理由はそういうことか」

「つまらないブラックジョークだ」

クリスはわざとらしく肩を竦めた。

「悪趣味だな」サクラは吐き捨てるように言う。

未だに何も思い出せていない……が、ここがこいつらにとって嫌な思い出でしかないということは分かる。そして敵の中には恐らく前世のこいつらを知っている奴がいるということも。

今回の任務は少し難しいかもしれないとサクラは思った。防衛本能で襲いかかって来る単純な奴らならまだしも、ここまで用意周到に出迎えてくれるとは……。

奴らはきつと何か知っている。思い出さないように、古傷に触れないようにと彼らが細心の注意を払っている何かを。僕が思い出せずにいること全て。

「楽しい楽しいサーカスの始まりだ」

「？ 何か言ったか？」

フローラ、クリスと共に先に行くヒバリが立ち止まって振り返る。

「いや、何も」

サクラたちは一様に首を横にした。だが、声が聞こえたのは確かだった。

「ともかく。この幻術を解くには奴らを倒さなければならぬな」

「どこからでもかかってきなさい！ 私が相手してあげるんだか

ら！」

「待て」

さあ行こうと足を踏み入れようとしたレイチエルを止めたのはサクラだった。

「どうかした？」

「一気に敵の本拠地に乗り込むのは危ない。ここは一人ずつ、それぞれ違う経路で行くべきだ」

連繋プレーを得意とするチームならともかく、彼らはそれぞれが個人主義である。視界に入った罪人ターゲットが自分の担当であり、その他は我関せずなのだ。

それに、彼らの過去を知っている奴がいるとするのなら、仲違いさせるのは容易なはず。奴らがそれを目的としているのなら、一緒に行動する人数が多ければ多いほど不利になるのは明らかだった。

「……分かったわ。それじゃあ、みんな気をつけてね！」

レイチエルはそう言うと、隣のビルに向かって行った。恐らく窓から飛び移り、一気に潜伏地の中層に行くつもりなのだろう。

「さすが俺の妹だぜ！　じゃ、俺も先に行くな！」

ヒバリは快活に笑い、彼女と正反対の方に向かって行った。

「まったく、元気な兄妹じゃ。それならわしは上から行くとするかの」

フローラはそう言うなり姿を消した。残るはクリス、鈴、サクラのみである。

「じゃあ、僕も行こうかな」

クリスは辺りを見渡して、侵入できそうな場所を探していた。

「クリス」鈴が声をかける。

「どうしたんだい？　鈴」

「二度と裏切るなよ」

鈴の表情は真剣そのもので。

クリスは思わず笑ってしまった。

「僕はもう大丈夫。だから、心配しなくていいよ」

「べ、別に心配なんかしてないからなっ!! あんたに寝返られ
たら俺たちが迷惑なんだよっ!!」

口を尖らせて言うところが、自身の言葉を裏切っている。クリス
はそれに気付いていたが、指摘すると鈴はさらにムキになってしま
いそうなので、止めておいた。

鈴もまた、ビルの中へと消えていく。

「君はどうするんだい？」

クリスはサクラに尋ねた。彼は暫くビルを睨んでいたが。

「確かめたいことがある」

サクラは堂々と正面から中に入って行った。

真っ直ぐだなあ。

彼を見送った後、クリスは半ば感心しながらそう思った。自分に
はない正直さが彼にはある。

「君は昔からそうだったよね、玲レイ」

「見てくださいよ、ねえ。あいつら、仲間割れしちゃってますよ
お」

チャールズは『彼女』に話しかけた。

「何だか楽しくなってきたねえ。そうは思いませんか？」

『メグリヤ』ちゃん？」

ガタガタと物が動く音に続き、噛みつくような声が響く。

「何も楽しくないわ!! 私をここから出さなさいっ、チ
ャールズ!!」

「無理なんですよ、無理ムリ！！ 君をここから出すことは僕ちんが許しませ〜ん！ だってキミは今も昔もずーっと僕ちんの玩具おもちゃなんだから……ね」

チャールズはさも面白くなさそうな笑みを浮かべた。

「あのヒバリとか言う奴に君のまがい物 抜け殻の魂

を埋め込んでみたけど、あいつから見事に私の罠にはまってくれちゃってますねえ。『あれ』が君だと信じて疑わない。君という『意思』がない限り、『あれ』は君であって君でないというのに」

生き物は肉体と魂で構成されている。魂がなければ肉体は朽ち果てるし、肉体のない魂は生物に成りえない。

「前世つて、どうして忘れちゃうか知ってます？」

チャールズはメグリヤに問いかけた。無論、答えは返ってこない。それでも彼は話し続ける。

「それはね、魂に『意思』がないからですよ」

肉体と魂が分離することによって生物は死を迎える。肉体は自然に還ることで地上から消滅し、魂は浄化を受けることによって来世に繋がれる。その際、魂に刻み込まれた『意思』は消滅するのだ。

『意思』を消滅させることによって、生き物は新たな生を得ることがができる。新たな道を切り開くことができる。だが、もし魂を浄化させなかったとしたら？

「面白いですよねえ、記憶保有者あいつのを見ていると。いつでも、どんな時でも苦悩している。たとえ幸せになれたとしても、いずれ死んでしまう。そして、気付いたらまた目の前にスタートがある。死んでは生き返るの繰り返しだ。彼らにゴールというものは存在しない。それなのに、救いを求めること自体が間違いなんだということに気付かないなんて、愚かなことです」

「何て人なの？！ そうやって私たちを縛っていたのね……！！」

「『縛っていた』んじゃないですよ。『縛っている』んです」

「狂ってるわ……！！」

メグリヤは声の出る限り叫んだ。チャールズはそれを無視し、嘲

るように言った。それは独白だった。
「……抜け殻の魂を見破れるかなあ、あいつらは

「だーっ、つつまんねー!!」

鈴はひたすらビルの中を駆けていた。そもそも、隠れ場所が多すぎるこのビルの中からたった七人の人間を探しだすことが困難なのだ。

それにしても。

「ったく、サクラの言う通りだぜ。ホント趣味悪いよなあ……」

真っ赤に染まった壁、床。数々の死体こそ無いが、引き倒された机や椅子が足場を悪くしている。

何もかもがああと同じで。

「大丈夫かな、あいつ」

きっとこのビルは、彼にとって忘れてしまいたい場所の一つに違いない。頭の回転はおせじにも速いと言えないが、それくらいのことは分かる。

何かが疼いた。ぎゅっと手を握り締める。

「俺は、俺だ」

声に出して言ってみる。

「鈴^{スズ}じゃない」

すると、思いのほか自信を持てた。

玲のことを思い出そうとすると、必ず自分ではない自分が出てくる。壊してしまえば手っ取り早いのに、なぜそうしないんだと闇の底から囁いてくる。

それじゃ駄目なんだ。

そんなことをしたところで何一つ結果は良くならないことを鈴^{リン}は知っていた。だから。

次は守ってみせる。自分の力で。

その時、物音がした。

「やっと出てきたな！」

鈴は嬉々として音がした方を振り返る。そこにいたのは。

「何だよコレっ……！！ とうなつてんだよ?!」

『それ』はニヤリと笑った。

「どうもこうもないだろ。俺は俺だ。さつさと始めよーぜ！」

不敵に笑う『それ』は金糸の髪に、青い瞳。どう見ても今の鈴の背格好とは違う。あれは、前世の俺だ。

「何の冗談だい？ これは」

冷やかな笑みを浮かべるクリス。彼が対峙しているのは、彼自身だ。

「僕にしては、冴えないことを言うね」

クリスよりも身長の高いその男は、同じく冷やかな笑みを浮かべて蔑むように言った。

忘れることを許さない、この場所で。

「まさか僕自身に遭うはめになるとはね……」

フローラが厄介だと言っていたのはこういうことだったのかと痛感させられる。確かに敵は幻術に長けているらしい。

だが。

「あいにく、自虐的行動は飽きてきたんだよね。悪いけど一気にカタをつけさせてもらうよ」

「その鎌で僕を倒そうって言うのかい？ こう言っちゃあなんだけど、今の君と僕には大きな違いがあるってことに気づかない？」

「僕と、お前に……?」

クリスは訝しげに眉を顰める。男は余裕綽々の笑みを浮かべていた。

「力、体力、スピード、魔力。全てにおいて君より僕の方が上だということ。……悪いけど、今の君に僕を倒せるとは思えないね」
暗い輝きを見せる瞳。

僕って、あんなだったっけ?

クリスは鎌を持ち直し、体勢を整えた。

ただ動き回るだけでは無駄な体力を使うだけだ。考えなければならぬ。僕ならどう動くか。普段どうしていたか。

「悠長に考えている場合かな?」

背後に男の姿

「クソっ!」

金属音が響く。二回、三回、四回……。だが、押されているのは常にクリスだ。攻撃を防ぐのに精一杯で、とてもじゃないが相手を倒せそうにない。

力が弱い、体力が持たない、移動が遅すぎる!!!!

考えるんだ。僕はどうやって

「だから、考えるだけ無駄だっけって言うてるだろう?」

振り上げた鎌が弾き返される。

考える、考えれば…… そうか!

クリスはふいに立ち止まった。それにつられて男も動きを止める。

「もう降参かい? あっけないね」

男はやれやれと言ったように肩を竦めた。だが、クリスが不敵な笑みを浮かべたことによって、男の形の良い眉は顰められる。

その瞬間、男の左肩に白刃が振り下ろされた。

「なっ……?!」

男は一步退き、肩を押さえる。

「まだだよ!」

クリスは闇雲と言っても過言ではないほど攻撃を繰り返していた。

「君、馬鹿じゃないの？ そんな風に攻撃していたら……すぐに持たなくなるよっ！」

だが、男の口調は切羽詰まったものに変わっている。やはり、思った通りだ。

「馬鹿にするな。あんたは所詮、過去の僕だ」

クリスは男の背後に回り込み、首を狩り取った。頭部を失った身体は重力に従って倒れ、切り離された頭部は地面にゴロゴロ転がった。男は驚愕の色を浮かべたまま絶命していた。

「考えて行動するのが駄目なら、考えなければいい。あんたの敗因はそこにあるんだ」

そして、この表情を忘れてはいけないと僕は思った。

「大丈夫かなあ、他の奴ら」

ヒバリは服の汚れを払いながら仲間の安否を心配していた。目の前には、見知らぬ女の残骸。

「こいつ、何が目的だったんだろーな。意味分かんねえことばっか喋ってたし、俺が何者かとか訊いてきてさ」

だけどどこか懐かしい。分からないけど、俺はもしかしてこいつを知っていた……？

「まあ、どうでもいいか。そんなの」

知っていいようが知らなかるうが、そんなのどうでもいい。ヒバリは何よりも『今』を大切にしているのだから。

その時、『声』が聞こえた。

「あー、分かった分かった。悪かったって言ってるだろ？俺も忙しいんだよ」

虚空に向かって面倒くさそうに言うヒバリ。

「……しょうがねえな、そっちに行つてやるよ」
苦笑と共に、ヒバリはその場から消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9198v/>

white snow

2011年11月20日19時12分発行